684-291
1200501578702
84
291

日本精神叢書第五十八

橘曙覽評傳

（折口信夫）教學局編

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak

684-291

684
291

文學博士 折口信夫

橘曙覽評傳

日本精神叢書 五十八

橘曙覽

評傳

文學博士 折口信夫

發行所寄贈本

一、本叢書は、主として我が國古來の典籍中より精神教育上適切なるものを選擇してその要點を解說し、廣く國民をして日本精神の心解と體得とに資せしむるを以て目的とするものである。

一、本篇は、慶應義塾大學教授文學博士折口信夫氏に委囑し、執筆を煩はしたものである。

昭和十六年三月

教學局

684
291

目次

一　晩年の作物……一
二　壯年の境涯……五〇
三　志濃夫廼歌舍集抄……一〇三
四　この雙紙のあとに……一二九

橘曙覽評傳

一　晩年の作物

天皇（スメラギ）は神（オホキミ）にしますぞ。天皇の勅（チヨク）としいはゞ、畏みまつれ

天（アメ）の下清くはらひて、上古（カミツヨ）の御（ミ）まつりごとに復る　よろこべ

橘ノ曙覽（アケミ）が、越前福井三橋の志濃夫廼舍で、五十七年の生涯を終へたのは、慶應四年八月二十八日であつた。

「此日、早旦自ら起たざるを知り、一二、後事を遺命し、且つ、如レ斯古（クノ）來未曾有の大御代に遭ひながら、眼前、復古の盛儀大典を見奉るに至らず、況や、かねての抱負も、將に達するに向はむとして、今日はかなく世を去ること、返す〴〵も口惜しけれとて、切齒瞑目せられたり。聞く人、其志のほどを悲しまざる者なかりき」と、臨終の様を追懐したのは、彼の長男井出今滋である。（明治卅六年作、橘曙覽小傳）

この英雄風な最期の記述せられてゐる日は、京都では、既に東京行幸の爲の訓諭が出るまでに、新代（アラタヨ）の光りが照りわたつてゐた。

その前日、八月廿七日には、紫宸殿に御して御即位式を行はせられた。大禮の則る所は古典にあつて、中古以來、儀裝・冠服皆唐制に據つたのを廢せられた。越前福井までは、まだ其御儀の仔細が、傳聞せられるに到らなかつたであらう。今數日、世を去ることが遲かつたなら、彼の末期の心は、如何ばかり明らかであつたことであらう。三日前（二十五日）には、越後柏崎で、日柳燕石が死んでゐる。彼とは風馬牛の生活を終つたのだが、同じ越路に來て、同じ思ひに沒したことが、ある因緣を感ぜしめる。八月廿三日には、會津城の一部が落ちた。廿二日、嘉彰親王新發田城に入城ある。廿一日には、即位禮を行はせ給ふ旨の奉告に、奉幣使が、皇大神宮に向ふ。北越地方では、その十六日に、長岡藩の反將河井繼之助が敗死する。十五日には、西園寺公望が、村松に入つた。此より先、六月、北陸道鎭撫使を罷め、會津征討越後口總督府參謀となつて居たのである。十二日には、總督嘉彰親王、越後三條に進まれてゐる。この六月、軍務官知事として、會津征討越後口總督として征途に就かれ、廿七日には、敦賀に次（ヤド）られてゐる。その二日前、八月十日には、鹿兒島から廻航した西郷隆盛が、柏崎に來着して、總督宮に拜謁して、新潟に向つてゐる。京都では、八月九日、加茂社行幸がある。

彼の死後、最近の日次（ヒナミ）を見ると、その翌日、山階陵・後月輪東陵に御參拜。四日目の九月二日には、嘉彰親王、新發田城を本營とせられる。三日には、福井藩主松平茂昭、命を受けて、永平寺の宗規を調べ定めることゝなる。九月八日改元。明治と號した。一世一元に定まつたのである。九日、丹羽長國（二本松藩主）降る。十一日、上杉齊憲、子茂憲を遣して、嘉彰親王に新發田に謁して謝罪し、會津征伐先鋒を命ぜられる。十三日、京都では、大久保利通、江戸の事態を陳べ、發輦の期が定められる。諸侯の國々の狀況で目につくのは、九月十九日、仙石久利、但馬出石城を毀つことを請願して聽されてゐる。東北では、伊達慶邦（仙臺藩主）謝罪降伏歎願書を、奥羽追

討平潟口總督四條隆謌に上り、板倉勝尙（福島藩主）官軍に降る。

十六日には、皇學所・漢學所が設けられる。十七日には、和氣清麻呂・楠木正成・兒島高德を岡山藩下に合祀することを許してゐられる。かうして、九月廿日には、愈、京都御發駕あり、廿一日石部、廿二日土山に著かせられてゐる。此日初めて、天長節の御儀を行はせられ、賜宴がある。之より先八月廿六日、聖誕日を天長節と稱し、賀宴を賜ひ、刑戮を止めるよしの布告があつた。光仁天皇御宇の舊制に復したのである。此日、東北では、輪王寺宮使僧、總督四條隆謌の下に到つて謝罪する。廿三日、酒井忠篤（庄內藩主）降る。

九月廿四日、途上、皇太神宮御遙拜、四日市に入らせられる。南部藩・磐城泉藩・湯長谷藩・平藩皆降る。廿五日、桑名に至らせられる。長岡藩主牧野忠訓、謝罪降伏。廿六日、熱田に著かせられる。翌廿七日、熱田神宮御親謁。羽後松山藩・龜田藩降る。東征大總督參謀西鄕隆盛、鶴岡入城。

十月三日、掛川に入らせられる。此日、伊達・上杉降伏の報せがある。又、六日、越前鯖江前藩主間部詮勝の出處疑はしきにより、歸國蟄居を命ぜられる。十月十日、藤澤に入らせられる。諸大名の扈從を多くして、自尊する弊を除かしめる令が出た。十一日、神奈川を過ぎさせ給ふ。その際、諸外國の船艦祝砲を奉る。十二日、品川に入り給ふ。此日、榎本武揚・大鳥圭介等、七隻を率ゐて箱館に出奔。大和柳本城主織田信及、崇神・景行二聖陵修繕の許しを請ふ。翌十三日、東京著御。江戸城を皇居と定め、東京城と稱する。十七日、朝堂に臨ませられ、萬機親裁の事告げ給ひ、詔して、祭政惟一の大典に基くことを示し給ふ。

これが、曙覽死去前後の世間の姿であつた。彼でなくとも、此間に生きて光榮を感じ、この休光を見ずして死なむことを悲しまぬ者はなかつたであらう。

彼はさすがに、詩人である。死ぬる恰も三月前、

五月廿八日より、病床にありけるまゝに、野山のけしきも見難く、臥しての

みありけるにより、つれ〴〵なぐさむため、大きなるうつはものに水いれ、小き魚放ちおきて、朝夕うちながむ。

湛へつる器の水に　鰭ふらせ、海川見ざる目をよろこばす

顏のうへに　水はしらせて飛ぶ魚を、見かへるだにも、眉たゆきなり

△窓の月　浮べる水に魚躍る。わが枕邊の廣澤の池

ひれはねて　小き魚の飛ぶ音に、寢るともなくて　寢る目　あげらる

恰も明治代の正岡子規の境地である。而も其よりも、深く沒入する所があり、又、時代の早さから來るうは調子の中にも、彼らしいものがある。曙覽がかうして臥してゐる間にも、天下のありさまは、刻々に著しく維新の大業に向つて變改して居たのである。如何に敏感であらうとも、一介の市井の隱士に過ぎない彼である。松平春嶽や、中根靱負（雪江）や、橋本左内等の福井藩の主從が、此間に經過した苦惱を、身を以て感じることは、固より出來なかつたであらう。江戸將軍家の親藩であつたゞけに、春嶽主從の忠誠は目立つたが、其と共に、板挾みの境遇に苦しみ、又薩州その他の壓迫に堪へ難かつたことは察しるにも、餘りがある。だから、此等の人々の苦しみは、地下（チゲ）の彼の心にも、通じたのである。彼の家に來遊し、又彼に學んだ人々に、歌を詠んでは與へ〳〵してゐる。北陸道鎭撫使に從つて、會津其他の征討に向ふことを奬めたのである。各藩共に、藩論が一決した後すら、個々の人の志は、各別途に向うてゐた。だから、容易に藩士の動向は定らなかつた。殊に福井藩では、藩主初め在京する時の方が多かつたから、一致した氣勢が、湧き立たなかつたことが察せられる。佐幕の氣勢は示さなかつたまでゞ、進んで從軍しようとはせぬ者も多く、又其を鞭韃することも、强くは出來なかつたであらう。故老の間には、春嶽が他家より入つて、藩の運命に心を用ゐることの少いのを怨んだものもあるであらう。又、主の意のまゝに精勵して刑死するに到つたのを、見殺しにするほかなかつた橋本左内の先例を見て、まだ十年にもならないのである。教養が上にばかりあつて、下は極めて昏かつたのは、福井藩ばかりではなかつた。僅か三百年の習癖によつて、動く事より知らぬ士人の寄りあひである。春嶽の誠意は、その藩國において、裏打ちして示さなければならない場合であつた。

さうした間に、自由な立ち場に居た彼は、彼だけの交友範圍において、風流にことよせて、激勵することが出來た。其とて、町人と士分とでは、身分違ひである。單に志濃夫廼舍集や、曙覽小傳の印象を我々が受けるやうなものでは、なかつたに違ひない。たとへば、野邨恒見に與へた歌

愚にも　まどへるものか。　大勅（オホミコト）　たゞ一道（ヒトミチ）にいたゞきはせで
勅（ミコト）にそむく　そむかず　正し見て、　罪の有無（アリナシ）　うたがひはらせ

後の歌、現實味は十分調子に出てゐる。併し輪廓を描き過ぎて、却つて表現不足に陷つてゐる。つまり心はやりと、あまりに特殊事情に囚はれ過ぎた爲である。恐らく、罪の有無は、勅に背くか背かぬにある。おのが身そこに惑うてゐるか、どうか糺して見て、疑ひ迷ふ心を霽して、勅に從ひまつれ、と言ふのらしい。「愚にも」の方は、少し悠揚とし過ぎてゐて、實感が逸れてゐるやうだ。世間には、かうした愚者が多い。さうではないか、と同感を誘つたに過ぎぬやうにも見え

る。が、山田秋甫さんの橘曙覽傳によると、當時軍監附きの要職にあつた門下野村氏の遲疑の擧動を憤つて、一時遠ざけたことがあつたのだとある。其ほど臆れてゐた人かどうかは、此歌だけでは、判斷は出來ぬ。恒見（淵藏）は、左内の手足となつて、密勅事件の裏に活躍した人である（永井環其他）。さすれば、景岳の最後に最痛切な感じを受けた人の筈である。其判斷に迷うたとしても、一分の理はあるのである。其にしても、此は彼の弟子だつたから、かうしたことも言ひやられたのであらう。或は、中根雪江から、多少さうした方面を託せられてゐたかも知れない。又さうした事を託する雪江でなくとも、中根氏の腹中に入つて、衷情の察せられない曙覽ではなかつた。だがとにかく、彼の此憤りは、やはり時流を拔いた所がある。單に歌よみとしての歌ではない。此二首はよくないが、氣魄は却て、後の方などには、強く出て居る。

此と時を同じくして詠んだと見られるものに、尙八首ある。皆彼の弟子に與へたのである。

大皇の醜の御楯といふ物は、如此る物ぞと　進め。眞前に——小木捨九郎主に

第三句聊か、平俗調に近づいた嫌ひはあるが、之を救ふに至るだけの力ある喜びが、一首に充ちてゐる。

さしたつる　錦の旗の下に立つ身をよろこびて、大刀とりかざせ——岩佐十助主に

三句以下の宜しさは、彼の純眞な感情の出てゐる宜しさである。殊に四句を受けて、五句のおほまかで、邪のない詠み口は、唯企てゝ出て來るものではない。

佐々木久波紫が大御軍人に召されて、越後路に下れる馬のはなむけに、

負氣なく勅に　背く奴等を　罰め盡して歸れ。日を經ず

同じ時また、芳賀眞咲に、

大皇の勅に　背く奴等の首引拔て、八つもてかへれ

吉田重郎主に、

大皇の勅　頭に戴きし功績あらはせ。戰ひの場

山内某　佐左衞門

大皇の勅　頭にいたゞきて　ふるはん太刀に　よる仇あらめや

上の歌の中、「勅」を言はぬものも、皆勅命を奉戴することの光輝に感激してゐる曙覽の心が、露はに出てゐる。其と共に、當時都鄙を分たず、野に在つた人々の歡喜したのは、此玉の御聲の搖曳を、草莽の身に受け奉る心をどりであつた。此昂奮ばかりは、今の世の我々にも、常に心に響き來るものがある。

此と時を同じくして出來たらしいのは、最初にあげた二首を含む連作（四首）であつた。

示レ人

天皇は　神にしますぞ。天皇の勅としいはど、畏みまつれ
太刀佩くは　何の爲ぞも。天皇の勅のさきを畏むため
天下清くはらひて、上古の御まつりごとに復る　よろこべ
物部のおもておこしと　勇みたち、錦の旗をいたゞきて　行け

彼は日頃は、唯の歌人であつた。併し風流の外に常に心に藏せられてゐたのは、此耿々の志である。日々に詠み、日々に樂しむ所を見れば、唯の市井に隱るゝみやび男に過ぎないのに、突如として、かうした氣魄の歌を叫び出した。彼が、交る人々を多く武士に持つたからでもあらう。が又、彼の學問の傳統は、その志を文學に埋れしめなかつたのである。第一首は、邊土の武士の、進退に踟躕する者のあるのを、喩したのである。

天使の、はろ〳〵下り給へりける（るに、？）あやしきしはぶるひ人どもの、あつまりゐる中に、うちまじりつゝ、御けしきをがみ見まつる、
隱士も、市の大路に匍匐ならび、をろがみ奉る　雲の上人

天皇の大御使と聞くからに、はるかにをがむ。膝をり伏せて

此もおなじ年の作であらうが、總督宮の御通過のあつた頃は、もう病床から起つことが出來なくなつて居たらうから、此は、二月中の作であらう。慶應四年正月九日、北陸道鎭撫總督として高倉永祐、副總督として四條隆平が任命せられ、二十日、參謀を具して發足した。廿五日、若狹小濱に著いて、藩士等に、奉命の誓詞を出さしめた。廿六日である。二月に入つて、鎭撫總督を北陸道先鋒總督と改めた。十五日、一行福井に入つた。上の歌に見えた歌らしいのびやかな所のあるのは、まだ世間の響きが、最後の勢に達して居なかつたからであらう。「示人」四首の、本格を行くものほどには、堂々たる所はないが、却て輕みにおいて、正直を感ぜしめる。此よりも、前の歌と思はれるのに、

大御政、古き大御世のすがたに立かへりゆくべき御いきほひと成ぬるを、賤夫の何わきまへぬ物から、いさましう思ひまつりて、

百千歳　との曇りのみしつる空　きよく晴ゆく時　片まけぬ
あたらしくなる天地を　思ひきや、吾目味まぬうちに見んとは
古書の、かつ〳〵物をいひ出る御世をつぶやく　死眼人

廢(スタ)れつる古書どもゝ動きいでゝ、御世あらためつ。時のゆければ。

彼の歌の、感激によつて、頓みに歌口の變つて行くと謂つた所が、明らかに見えるものである。第一の連作には、稍及ばぬが、第二の四首よりは、遙かに立ち優つた古風の氣魄が現れてゐる。其が「きよく霽れゆく時かたまけぬ」「……時のゆければ」などの句に窺はれるのである。第三首目は、例の飄逸味が出過ぎてゐる嫌ひはある。此は前のを、鎮撫總督福井來着の時のものと見て、其よりも更に先つ、慶應三年のものには違ひなからう。が、十月十四日の將軍の大政奉還上奏、十五日の勅許あつて直後の歌とは、斷言は出來ない。なぜなら、彼の如き身分で、さうした出來事に對して、明確に事件推移の判斷がつかうとは思はれぬ。其風聞が傳つた處で、必、半信半疑の間に彷徨したのに相違ない。「……立ち還り行くべき御いきほひ……」とあるのは、婉曲に歌つたと言へば其までだが、大體もつと前から、察してゐたことでもあらうし、又彼にしては、極めて漠とした信念だつたのであらうから、十月よりも早く、又稍遲れて、さうした風聞が具體化して胸におちて來たのだらう。而も、之が古學・古典の効果だつたと言ふことを、沁々感じ、自分の專門だけに、自信を以て言うた所に意義がある。だが、小づくりに出來てゐて、感激よりも、機智の出て來る傾きのあるのが、くちをしい。その擬人法に似た言ひ方も、歌がらを低くしてゐると言はねばならぬ。併し考へて見れば、さうまで感激が一つ有樣で、作物に續くといふことも考へられないから、かうした起伏も自然だ、と言へば言はれる。同時に、かう言ふことも言へる一面が、ありはすまいか。卽、正義の道をとり違へて、江戸將軍に誠意を盡すを正しとする樣な判斷が、古書古學に疎い人々の間には行はれてゐた。——道理から言へば、さうかも知れぬが、おのれ等に近い眞實はこゝにあると言ふ風な、近きに溺れた人々が多かつたのである。其にいろはから說き訓すやうな事もせねばならなかつた。勤皇の爲の啓蒙を、彼はその周圍に集る人にはして居たのだ。第一義の耿々の志を叫ぶのでなく、諄々と說いて敎へると謂つた歌が、彼には相當にあつて、其が多少歌柄を落したといへよう。だが元々、彼の歌にはさう言ふ側もある。志士としての運動に携ることのなかつた、一人の學究らしい所が、其所にも顯れてゐる訣なのだ。

武士

尊かる天日嗣(アマツヒツギ)の廣き道　蹈まで　狹(セバ)き道ゆくな。物部(モノノフ)

眞心といはるべしやは。眞ごころも、正しき道によらで盡さば

大綱と　天日嗣を先とりて、もろ〳〵の目を編む國と知れ

天皇に　身もたな知らず　眞心をつくしまつるが、　吾國道（ワガクニノミチ）（クニツミチ）

一・二・三はかうして導かねばならぬ蒙昧な武士の、まだ多かつたことを示してゐる。他藩すら、此と同じ佐幕黨が多かつたのである。況して、福井ほどの親藩であつて見れば、江戸將軍に感謝の心を持つた者も、多かつたのである。見當に狂ひがなくば、此連作も、其頃に近いものであらう。大分くどい所はあるが、やはり二首目の歌に、境遇も、時代も出てゐる。達意は達意でも、「大網と」は、道歌に近いもの言ひである。第四首は、之を文學化する情熱が足らぬ。此も亦、人を教へると言ふ目的に煩され過ぎて、文學を失うたのである。

示レ人

○君臣（キミトオミ）（キミオミノ）品さだまりて　動かざる神國といふことを　まづ知れ

此の歌などは、當時ひとゝほりの知識ある者でなくては、君は天子、臣は公家・將軍・諸侯、殊に、將軍をさしてゐるのだと言ふことは、明らかには悟らなかつたであらう。多少學に入り立つた者或は、此道を少しは知つた者に、與へた歌に相違ない。

曙覽の歌や、文章の中に、やゝ心得難いことが二つある。一つは、今までにあげたものゝ外に、存外王事に關聯して、情を抒べたものゝ少いことである。今一つは、明治以後の開化時代に遇うた古學者らの悲憤に似た歌の、既に相當にあるやうに見えることである。

此は、彼自身も自覺してゐたやうに、國事を憂ふるに値せぬ町人だつたに繫らず、其でも相應に、慨（ウレタ）み、歎きはしてゐたのである。然るに、藁屋文集に採錄せられた消息文などを見ても、自由に慷慨を述べたものもあつてよい筈なのに、其ほど感じ深いのもない。中根雪江に與へたものなどには、殊に其があるべきであらうが、一向見當らないのは、一往思うて見てよい隱れた理由があるのではないか。

曙覽の死んだ當時、長男今滋は廿三であつた。「榊の薫」などに見える今滋の作物は、たとひ曙覽の添刪は加つてゐるとしても、相當な力量が窺はれる。其にしても、「志濃夫廼舍歌集」は、彼の自撰である。今滋の考へは加つて居ない筈である。明治十年印行の時も、原本のまゝ出したに違ひない。第一集の初め少しは、製作順かと思はれるふしがある。其と最後に近いものに、慶應三・四年のものが多いと言ふまでゝ、年代順に排列したものとは、どうしても考へられない。さうして國事に關係あるものは、四集・五集に纏つてゐるやうだが、尙他の卷にもちらばつてゐる。よつて思ふ。激越した勤皇の作物も、此作風からは、必多かつたものと思ふ。だが世態の推移が、豫め測り難かつた時である。若し亦、何時人の目に觸れて、禍を蒙ることがないとも限らな

い。だから、多くさし支へないものを列ねて、歌集・文集を編んだものと見る考へもなり立つ。此想像が當つて居たとすれば、彼の持つ古風の諷詠が、其間に湮滅したことになるのである。此感は、歌集よりも、文集において更に深まるのである。

何しろ、雲脚の變幻極りなく、所謂端倪すべからざる時代の相（スガタ）であつた。かの天日を直に仰ぐ喜びに咽びながら、息を引きとる寸前までも事態は、如何やうに推移するかは、彼等の知識からは、豫斷出來なかつたのである。さうして其の轉變から釀し出される苦汁は、春嶽と、其から中根雪江等、知己の大身も、舐め盡して來たのである。曙覽は、その黑い目にも其を見、苦の下に目をつぶつてからも、幾度かくり返されて行くのであつた。かうした境遇の多くは、彼の與り難いことでもあり、一町人であつた彼には感じも出來ないことだつたに違ひない。其でも、さうした細かな氣のつかぬ雪江等ではない。又目前に橋本左内等の事を見聞きして來てゐるのである。たとひ之を町人の感情に飜（ウツ）して見ても、相應な衝動であつたに違ひない。武士に接して、武家魂に觸れたでもあらうが、根は久しい町人の家の子である。感じきれないものがあつたに違ひない。此點では、福井藩の人々と、悲しみを頒つことは出來なかつたであらうし、又さうした事をうち明けて、一町人に謀らふ程、福井藩も、小くはなかつたのである。

だがともかくも、彼個人としては此激しい動亂の間にあつて、處理すべきものは處理する必要を覺えたに違ひない。慷慨あまつて忌諱に觸れさうな作物には、序詞を書き潛めて、題意を仄かにする事に努めたであらうし、又作物自らあまり露はに意趣を示してゐるのは、省き隱したことも ないとは限らない。其故にこそ、今ある曙覽自撰の「志濃夫廼舍歌集」が、一面あまりに文學式な、又享樂態度に見える側が、目立つのかも知れない。

元來、國學者の思想にも、時代の推移があつたので、賀茂・本居兩翁並びに其息の濃くかゝつた人たちの間には、尊皇から引いては攘夷に到る情熱は見えても、討幕の氣はわりに薄く、却て、江戸讃美に傾くものすらあつたのである。此がすつかり面目を改めたのは、平田門の人々に初まると見てもよいのである。勿論此には、例外とも言ふべき人々もあつたことは否まれない。曙覽は、傳統から言へば、伴蒿溪門から宣長門に入り、更に大平に學んだ田中大秀の弟子である。學風も亦自ら、平和な殿人（トノビト）風のものを傳へたであらう。古代は古代、現代は現代、そのいにしへの姿を正しく伸べて來たのが、今の世のありさまだとする、存在其自體を是認する一般の學風が、彼にもあつたに違ひない。だから、橋本景岳風な西洋を知り過ぎた態度には、面を背けたであらうが、大體において時代としては、溫和な思想を抱いて居たに違ひない。又、其が福井藩上層の

指導精神でもあつただらう。

かう言ふ時代では、少しの類似が相牽くと共に、瑣細な相違が亦、甚しく相撥ねる形をとるものである。慶應から明治へかけて、ともかくあれほどはたらいた春嶽・雪江等主從が、わりに幸福な風に見えぬのも、此爲であり、春嶽が自ら、曙覽の藁屋を訪れ、雪江が屢世間外の誼みを彼に示したのも亦、此爲であらう。單に索漠たる邊土の領國に、纔かに見出した藝の綠地として、彼を見たとばかりも考へられない。當時の福井藩は、猶他藩と同じやうに、必しも打てば響くと言ふほどには、春嶽の思想に靡く者ばかりではなかつたのである。而も、雪江の斡旋によつて、曾ては平田の門ものぞき、現に宣長の孫弟子の資格を得て、地方としては、重く見られた彼である。謂はゞ、鄕土においては、一つの名物になり初めて居た彼である。さすれば、藩主が之に、惠みを垂れようとするのはあるべきことである。併し既に此頃の春嶽は、心國事に忙しく宗家德川の運が、長閑に見過されずなつてることは切に感じてゐた。田安から入つて、越前家を嗣いだ彼である。それに、西洋事情に通じた左内の影響の多かつた彼であつて見れば、自ら前代凡庸の諸侯が懷抱せなかつた、複雜な内容を心に持つて來て居たに違ひない。だから恐らく、曙覽の如きは、一隱士の稍抽んでたものと感じられたのであらうが、固より其以上に考へられる訣もないのである。

或は思ふ。曙覽こそ、かうした春嶽主從の思想の影響を、自らの敎養の上に移し育てたと言ふことになるのではないだらうか。其だけでも、世に碌々として居た和學者輩に比べれば、彼の學者として、又文學者としての優れた位置を占むることを示してゐるのだと思ふ。彼の一成績を多く遺さなかつたけれども一學は根柢のあるものであつた。さうして更に、彼の文學は、此根柢に根ざして、力强いものを表現して居たのである。かうした力强さの現れる所、或は彼自身すら、うつかり疑ひの目を睜る者に觸れることの危險を考へねばならぬ所があつたであらう。其爲にこそ、其集の作物の排列が、前後を濫りにした痕を殘したのであるまいか。同時に又其が、彼にあるべくして存しないことのいぶかしい——、時勢に向けての激越した文章・和歌の整理せられてゐることを仄めかすのではあるまいか。

ある時

何ごとも時ぞと念ひ、わきまへて　みれど、心にかゝる世の中
忘(ワスレ)むと思へど、しばしわすられぬ歎きの中に、身ははてぬべし

水車　ころも縫ふ世となりにけり。岩根　木根立（キネダチ）　物言ひいでむ

おなじく、「ある時」と題した作物である。題は、ある時の感概を述べたことを示したにしても、前の二首には、題として韜晦めいた口つきが現れてゐる。此だけの詞書きでは、誰にも、それの出來た境涯は、完全には察せられまい。而も「何ごとも」の方は、「……おもひわきまへて」だの「…みれど心にかゝる世の中」など言ふ句々の相關から來る語感は、相當に卑俗なものがある。かうした調子が出たのは、心が可なりくづほれ、めいりこんでゐた時に相違ない。其くどき言（ゴト）らしい低調が、別にある風情を見せてゐる。だが其かと言つて、其が此歌をよくして居るのでは、決してない。此低調は到底、國を憂ふるますら雄の歎きをこめたものとは感ぜられない。何か身邊雜事に對するあきらめと、執著とを言つたものと言ふ風にとられるのである。恐らく「時ぞとおもひ……」から考へると、時運の未熟せないことを痛感した趣きである。「忘れむと」の歌は、下の句が相當特殊な心を語つてゐるやうに見え、其と共に、俗臭を脱してはゐる。が、「しばし」と言ふ語を挿んだ理由が訣らぬのである。彼の練達した技術が、どうかすれば、事もなげに、併し亦、感激の乏しい、さうして又、通俗と言ふ點で人々に喜ばれる語句を形づくることもあるのである。此とても、慷慨の志の酬いられぬ間に、解決のつきさうもない大事を控へたまゝで、我が身まづ果てるだらう、と悲しんでゐるのである。が、其程痛切には來ない。

水車の方は、ある時と言うてはゐるが、「偶感」と題してもよい程のものである。併し歌自身は、ほねつぽい所を持つてゐる。機械力に對する理會なく、文化社會になり行かうとするのに反感を持つた樣子が、露骨に出てゐる。岩根木根立物言ふ時代は、日神隱れ給ひ、草木に至るまで妖言を發した。そのやうに、こんな不思議の行はれる—妖術をときめかすやうな時代には、ついで萬妖悉く起るに到るだらうと言ふのであつて、もとより珍奇な物に接しての喜びを歌うたものではない。謂はゞ、新文化に對する咒ひの詞である。この西洋嫌ひは、だが決して彼一人ではなかつた。世間一般が新しくてよいものを、善しと認めるに至るまでには、まだ〳〵年月が、いつたのである。だが、此歌で見ると、正否はともかくとして、根柢ある物言ひらしく感じられる。それが、古典から來る力强い一種の表現論理なのである。

勿論「ある時」の題のあるものが、皆さうした傾向なのではない。「をりにふれてよめる」と謂ふ單なる偶感に過ぎないのである。

ある時

友ほしく　何おもひけむ。歌といひ、書といふ友ある　我にして

草莽（クサノイホ）さひづりめぐる　朝すゞめ　寢耳に聞きて、時うつすかな

ひよりぞと　思ひて出づれば、風さむし。全（マタ）く好き日は、日にも得がたし

私の無き空にすら、全くよき日は乏しきを　人はいはんや

如何にも偶感による偶成らしく、おのれ自らも、おのれに囚れることなく、極めてひろ〳〵とした氣持ちに、詠み出でゝゐる。

第一首は、類型でもあり、又其を幾分か拔け出た所は下句に見えるが、畢竟かうした歌は、作者を背景とし、註釋とすることで、價値に增減の感じられるものである。第二首も、全く類型はない訣ではない。が、「さひづりめぐる」だの、「寢耳に聞きて」などが、懶さを見せて新味を覺えさせる。其よりも、第五句自身と、其配置が、此歌を出色なものとしてゐる。第三首は、下句が全く抽象になつた上に、如何にも物言ひが常識を出でないものを感じさせる。が、歌として見る上は、上句もよく、下句は今少し勝れてゐる。たゞ其が離れ過ぎてゐるので、—之を接觸させて感じようとすると、道歌めいた印象を受けないでは居られない。此歌に曙覽としてのよさを保たせようとするなら、上下句の繫りの緊密を緩めて感じる必要があると思ふ。「私のなき」と言ひ出した第四首は、まづ概念めいたものを感じるのだが、此とて曙覽の語感や、語勢を考へにおいて見れば、棄てられぬよさは、持つて居る。殊に「人はいはむや」の樣な、無成算な、技巧の隙き間から、突如として出て來た、半成の新技法を見ると、さすがだとは思ふ。此漢文くづしと國文脈との間に釀されるある混成感、前の「…日は、日にも得がたし」も、其から來る好感が人を牽くのである。之を又、曙覽全體におしひろげても、彼の作品のよさは、此點が餘程與つてゐるやうである。尙此歌に託（カコツ）けて言ひたいのは、曙覽の格調の一種の流動性である。「…全くよき日は乏しきを…」、かうしたある人々には快い流暢な、近代の散文質を實に多く含んでゐるのである。「今も世にいまされざらむよはひにもあらざるものを」「髮白くなりても親のある人も多かるものを…」此一例をとつても知れるやうに、曙覽の親しみ易さ、又曙覽の自由暢達を思はせるものだが、どうもやはり、此人の歌の質における大きな弱點にもなつてゐるのだと思ふ。

其等は閑話（ムダゴト）として措くであらう。「ある時」の傾向の詞書きは、色々ある。

ひとりごとに

幽世（カクリヨ）に入るとも、吾は　現世（ウツシヨ）に在るとひとしく　歌をよむのみ

歌よみて遊ぶ外なし。吾はたゞ　天（アメ）にありとも　地（ツチ）にありとも

文學における自然主義を通過した後の今人は、寧、ある點素朴である。其より前の人は、やはり

文學の爲の擬態といふべきものがあつた。昔ほど、其が見られる。漢文學によつて導かれた文人には、何としても、高士と謂つた氣位の、作物の上に誇示せられる事が避けられなかつた。曙覽ほどの人であり、又歌その物を見ても、さして其があるとも思へぬが、尙此歌を直に心に移して、曙覽の印象を作つてはならぬ氣がする。勿論此だけの覺悟もあり、又其よりも更に執著があり、もつと〳〵氣禀の高さはあつたに違ひない。併し、彼の友常見野梅との交際などを中心にして見ると、極めて安易な氣持ちも多かつたものと思はれる。だが、彼の生活及び性格が、記錄・傳聞によつて考へられるよりも、彼の殘した作物によつて組み立てる外のない今からは、作物に現れた彼を、凡彼其人と見て行くより外はないのである。だから、文學を通して見る曙覽は、此がその眞の聲、と言ふべきであらう。第一首は、語り過ぎて、散文より先の深さに入ることが少い。第二首は、やはり下の句になつて放散し過ぎた嫌ひはあるが、其だけにある舊風ながら深い文學味の、其句に感じられる點が優れてゐる。次の世を語るにしては、「遊ぶ外なし」が、空想を缺いた表現である。どうしても現世に持つて來ねば、思惟も出來ぬ現實派の文人だつたことを示してゐる。兼ねては又、寫生主義以前に夙く、彼のある點まで寫實態度を持つてゐた原因でもあるのだらう。彼は町人である。さうして隱士として、廣い世間の事にかけては、春嶽・雪江の持つだけの知識はなかつた筈である。だから切迫した時代のとよみの中に、かうした「ひとりごと」も嘯いてゐたのである。此歌の前にある連作が七首。

赤心報國

眞荒男(マスラヲ)が朝廷(ミカド)思ひの忠實(マメ)心　眼(メ)を血に染めて、燒刃(ナキバ)見澄ます
國のため念ひ痩せつる腸を　筆にそむとて、吾が世ふかしつ
仇に向き　膽(シヲ)たゝきけむ古人(フルビト)に　ならひてこそは、國に仕へめ
正宗の大刀の刃(ハ)よりも、國のため　するどき筆の鉾揮(フル)ひみむ
國を思ひ寢られざる夜の　霜の色。　月さす窓に見る　劍かな
國汚す奴(ヤツコ)あらばと　大刀拔きて、仇にもあらぬ壁に物いふ
松の葉の夜おつるにも　耳たてつ。　枝ならさゞる世とは、　おもへど

曙覽には、かうした態度が、常に見られるのである。其は、題材が現實であるか、類型式な知識とも言ふべき空想であるか、どちらにしても一往繪樣に構圖して見て歌ふと謂つた風である。――此は一つは、彼のこくめいな言語技術が、さうした感じを深くもさせるのだらうが――さう考へて見るが、よい樣である。此なども、自分から出て繪になり、繪が再戻つて自身に入つて來ると謂

つた形をとつてゐるので、一々が繪樣見た樣になつて、心に反芻せられて來る訣なのだ。そこに、內容とは又別な、ある悠揚として、信賴の出來るものを感じさせてるのである。「眼を血に染めて」などは、上乘の技法であつて、平凡な第五句を力强いものにしてゐる。と同時に、二三句殊に第三句が、中心から跳ね出してしまうた嫌ひもある。「國の爲」も、三句と四句との離れが感じられるが、其も五句が、すつかり方角を換へてゐる爲に、缺陷はそちらへ移つてしまつたやうに見える。が、やはり缺點は、毛ほどのものでも感覺に殘る。ともかく「吾が世ふかしつ」は、夜更けまで起きて居たとなのではない。老いを覺えるまで、憂國の磊嵬を紙の上に書き苦しんだ、といふ境遇を空想してゐるのである。わが齡(ヨワ)老けたるを、夜深く覺ゆると言ふ懸け詞でもなくて、而も氣分だけはやはりそれに這入つてゐる。言語の効果多い技術の對立してゐるのが、此歌の不統一感をなしてゐるのは、事實である。「國の爲思ひ痩せつる」も「……やせつる腸を筆に染むとて」も「わが世ふかしつ」も、皆獨立させて見れば、心牽かれる句には違ひない。だが其だけに、一首の格調の上に擾亂が起るのである。「仇に向き」、此は、古人伊企儺を、心の上に活して來る熱情が足らなかつたのである。語だけは、「仇に向き」と言ひ「膿(シリ)たゝきけむ古人に……」と言ひ、きつぱりした古朴を持つて居るのだが、語だけでは、どうにもならぬものゝあることを敎へてゐるやうだ。「正宗の」、根岸派發足時代の低徊した表現が、既にこゝに出てゐる。「國を思ひ」は、彼の劍歌の中の最平明なものであるが、同時に興味が外に向ひ過ぎて、淺くなつてゐる。でも、新派短歌發生時代には、こゝまでも、行つて居なかつたのである。「國汚す」、曙覽の一つの重要な特殊形式なのだが、其に必伴ふ顧みて他を言ふと謂つた所も、はつきり出て居る。慷慨を主題とする敍事詩で、決してその抒情詩ではない。以上六首は、彼が客觀質を深く持つた人なる事を示すのであるが、同時にかうした題材を、敍事式にでも、こゝまで糶り上げて來る感激の、彼の胸中に潛むことを窺はしてゐる。だから、單なる慨世の詠と見るのは足らぬが、同時に全く情熱のないものと見るのも正しくない。其は他の方面から、一言にして說明することが出來る。敍事詩などを興味の外に置いた此代の人であり乍ら、かう言ふ題材を選ぶことの多かつたのは、彼の傾向ばかりでなく、其道義感と、文學との結びつき方の、特殊性を示してゐるのである。さうでも言へば、足るだらうか。最後の「松の葉の」は、彼の日常の平和な安住生活に還つた直後の正直な心であるが、其だけに何やら、背越しに擲げ出された氣がする。「……夜おつるにも」には、一つの力を感じるが、一首全く常人常時のもの言ひである。だが或は思ふ。さうした歌ならば、こゝに列ねる訣はない。何かの意味で、連作から放すことが出來なかつたのであらう。其で、今一往反省して見る。此の歌の持つて

ゐる類型風の物言ひの間に、何やら潜む不安な、人を窺ふ様な所に心づくものはないか。さうして考へると、此長く治平を保つて來た世であり、又さう願つてゐるのだけれど、耳は、ある擾亂の響きを期待してゐる。ふとの音にも、かの音かと思ふ、と言ふ彼の衷心の仰望をとも言ふべきものを、藏した一首だ、と見るべきかといふことである。故らに調子をしづめ、聲をおとした爲に、かうした凡庸な外見の作物となつたのであると思ふ。詞書きと、卽かず離れずのやうな形でよまれた劍の歌が、最後になつて、びつたり赤心報國の意を暗示してゐるのである。唯外夷を惡むと謂つた風に解釋の出來る外貌の中にも、長く續いた苟安の世の轉變を思うてゐるものが、一つ〳〵寓せられてゐるのではないか。彼は町人である。隱士である。同時に、平田派の灌頂を受けたかも知れぬが、素質からして、本居派の學風を遵奉する人である。事實亦、當時の本居派の地方學者の傾向を著しく見せてゐる一人である。だから常の思想は、極めて平穩であつて、而も時としては、獨り潜かに燃える所を持つて居たに相違ない。だから、生活と文學とは、竝行しないともあり、多くの場合竝行し乍ら、內に潜む熱となつて藏せられてゐる。さういふ形になつてゐたのであらう。

失題

何わざも、我が國體にあひあはず　痛く重みし物すべきなり

まのあたり　たよりよげなる事がらも、後に到りて　さあらぬが多し
恐るべし。末世かけて　國體に　兎毫ばかりも、疵のこさじと
事により、彼が善き事もちふとも、こゝろさへには、うちかたぶくな
其のわざを取り用ふれば、自ら　心もそれにうつる恐れあり
目のまへの事いふならず。禍の遺らむ末の世を　思ふなり
潔き神國の風　けがさじと　こゝろくだくか。神國の人

此も失題といふ程のものではない。唯序を書けば、長くなり過ぎさうだといふだけのことのやうにも見える。歌には攘夷の情熱といふより、西洋文化の、武器といひ、機械工業といひ、段々入り込んで來るのに憂ひを持つて、末はどうなつて行くことか、と御國の後の姿を觀じたのであらう。古典を生活の指標とし、古典を內生活に活さうと努めた國學者の一人であつて見れば、當然深くさうした憂ひを抱いたに違ひない。此が、明治の御代になつても、尙長く續いて、

檀原の宮に還ると思ひしは、あらぬ夢にて　ありけるものを

——矢野玄道——

一層深刻な叫びになつたのであるが、新舊の交替ほど目眩はしいものはない。其復古の情熱と

共に、更に新しい文藝復興の時代が來ることを、明治廿年代の國學者は夢想もしなかつたであらうし、明治聖朝の稜威（ミイヅ）に浴するかせぬかに、此世を去つた曙覽の、まだ舊時代の夢深かつた此歌製作時代には、固より空想もしなかつたことであらう。唯、かうした文物が輸入せられ初めて、やがて此國は悉く、其に風化せられて行きさうに見えたゞけに、深い杞憂を感じたに違ひない。さればこそ、かうした新文化をとり入れたのも、政權を申し江戸將軍の責任としか、世間は考へなかつた。かうした狀態は、國を賣るものと謂つた誤解までも、江戸に集注した。だから攘夷の事を遂げようとすれば、王朝の昔に還る外はないと考へたのである。宮廷は、神のいます所であり、さうした外來文化を却ける御威力のおはすこと想察し奉つたのである。かう言ふ點において、靜かに皇道を思ひ奉つた曙覽などの思想にこそ、其を正しく窺はせるものがあるやうに思ふ。「潔き神國のふり」には、外夷文化を却けるには、この道による外はないといふ考へを示してゐる。だが此歌、「心碎くか」といふのは、さうした事に盡瘁する人々の勞を謝する意で、「心を碎き給ふことよ」と言うたのだとは思はれるが、「か」の力點不明の爲に、「心碎く人ありや」と立つても居ても居られぬ思ひを陳べてゐるやうにもとれる。七首の中、六首までが呪ふべき現狀を歌つてゐる。だから、此一首では、意義の轉換がしきれないのであらう。併し「心碎くか」をさうした皮肉な用法に据ゑる訣もあるまいから、やはり古風に從つて、「心碎く」人あり。其人こそ神國の人なれ、と謂つた感激を表したものと見るべきのである。恐らく此は空（クウ）に作つたものでなく、「示し人」など題すべきものではあるまいか。謂はゞ、中根雪江の如き人に寄せて、更に春嶽にも傳達して貰はうといふ考へなどがあつたのではないか。或は其心は果たさないまでも、さうした心動きに堪へずして作つたものと思ふことは出來ないだらうか。直接にかうした心を寄すべき人は、福井藩に關係深い人に違ひない。さうして、神國の業を汚すまじと努力する勞を、氣安く犒ふ事の出來る親しみが、「心くだくか」といふやうな安易な表現を採らせ、其爲に意義の不安定をすら起したものと見られよう。さう見ると、此歌極めてとほりのよいものとなつて來る。併しこゝに、考へねばならぬ事がある。一體江戸將軍親藩の主或は公子で、凡愚でない人は、凡新文化の意義を解して居たものが多かつた樣である。其中でもとりわけ、田安家から福井に入つた慶永―春嶽は、それの目につく人である。されば こそ、樣々新しい文化を移植しようとした。殊に福井の蘭醫笠原良策―白翁の建白によつて種痘法を初めて採用し、遂には幕府にも獻策して牛手痘を實施せしめた人である。而も此良策は、曙覽には、極めて親しい間がらで、友人であり、擁護者であり、兼ねて、彼からは歌文の指導を受けたと言ふほどであり、其子元直、其弟健藏等

は、曙覽の弟子であつた。而も、其「牛痘問答」を添刪し、又其除痘館の祀りの爲「拜除痘神詞」を代作してゐる（藁屋文集）。此外歌文及び書牘の上に、其親しみが著しく見えてゐる。

春嶽は、かうした新文化には、著々と手を染め、而も新知識橋本左内を重用した春嶽である。武備についても、鐵砲隊を組織して、弓・長柄組を廢め、福井でふんびいる銃を製造し、大砲を鑄て、蘭法砲術師範を置いた。又洋學を奬勵して、藩の明道館において、講義せしめた。かうした一方、米國の要求を拒絶すべきことの獻策をして、開國論を否定してゐる。これは皆當時として、最正しい策ではあつたが、順調には進まなかつた。而も、春嶽の計畫は恐らく、纔かに側近の者の外は、藩中の人々にも徹しなかつたであらう。又彼自身の内にすら、當時の人の持つて居た新舊、内外の矛盾があつたに違ひなかつたであらう。勿論さうした新しい世間を夢想だもしなかつた筈の曙覽などには、見當もつかぬことであつたらう。ある部分は心を喜ばし、他の部分では憂へさせられる、と謂つたことが多かつたらう。其に、刻々に迫つて來る新時代に持つたとりとめぬ脅迫感、さう言ふ風に、彼には、救ひなき前途を思ひ惱むことが多かつたらう。此連作も、さうした時代の苦惱が、表現せられてゐるのである。

「何わざも」の歌には、國體との合不合を見定めるやう。愼重な態度を要求してゐる——對談めいた氣分が出てゐる。「まのあたり」には、便宜さうな面に囚はれて、後患を顧みないことをおつとりとだが、反省させようとしてゐる。一時の事にかまけて、天下後世に恨事を殘さぬやうにと言ふのが、「おそるべし」の歌である。今を糊塗する爲に、永い憂ひを思はぬ事を戒めてゐるのである。此二首も、濫りに憤つてゐるのでなく、「人に示す」態度である。外國文化をとり入れる時に、何時も與へられる非難は、曙覽も之をしてゐたのだ。「事により」が、其である。つまり、蘭方醫術や、兵術のよさを彼は認めてゐるのだが、心醉して行く當路の人を見てゐると、不安に堪へられないのである。人に與へる爲に作られたもので、獨り言でないことは、感激よりも、寧、理論風に出てゐる所でも察せられる。「心さへにはうち傾くな」というたのは、忠言であつて、叱咤してゐるとは考へられない。「そのわざを」を見ると、もの柔らかに注意を與へてゐる氣味は、前の歌よりも、一段である。連作とは言へ、此歌少し獨立性が缺けてゐる。互に理會しあつてゐる人に言うてゐる趣きの明らかなのは、「目のまへの」である。あなたは、私が目前の憂ひに囚はれて居る。兒孫の世を思へと言ふが、その末の世を思へばこそ、かうして忠告もするのだ。今目前の事にかゝづらうて、禍を兒孫の代に殘すことを虞れゝばこそ、かうも言ふのだ、と人に思ひ返させようとして居る風が見える。唯、適切にはどんな事件に關つてゐるのか、考へ

つかない、ちと雲を摑む樣な處がないでもない。此一聯恐らく夷狄の風に泥み行く世態を憤つたものと言ふ風に見られさうだが、さうは見られないのである。

ある時作る

利(クワサ)のみむさぼる國に、正しかる日嗣のゆゑを　しめしたらなむ
神國の神のをしへを　千よろづの國にほどこせ。神の國人

其でも、此歌などは、凡作つた場合が想像せられるのである。どうしてかう言ふ知識を持つたのだらう。唯抽象風に、外國人は利にのみ奔つて、主の尊嚴をすら知らぬと言ふのではあるまい。上二句に特殊性を持たせてゐるのだから、やはりこゝを輕く見る訣には行くまい。彼の夷狄らは、利を貪り、利を營むことにのみ營々としてゐるが、其故にこそ、王者の興亡が常ならぬのである。正しい皇統の連綿としておはす故を、彼らに知らしめてやるがよいと言ふので、次の歌の「千萬の國にほどこせ」といふのとおなじく、假想した相手神の國人に言うてゐるのだ。さすれば、夷狄の、利に敏いことを聞いて、又人に諭したのだ。さう言ふ外國人などゝの通交に、わが國が、不利益の立ち場にばかり立つてゐた事を知つてゐたのである。だから、全く國情に疎い町人とのみは、見られぬのかも知れぬ。次の歌は、わが國情の美しさを、痛切に感じそめた時代の、今まで知らなかつた國民としての誇りを示してゐるのだ。だが、神の國人と言つてゐる處から見ると、唯自分等をこめて庶民を言ふのではない。やはり上に立つ爲政者に、誂へてゐるやうである。神國の神の政をとる人を、さすのである。我に、萬邦に誇るべき神の道あることを、叫んでゐるのだ。だから、物質の文化の進んでゐる彼等よりも、優れた神の道あり、之を與へ施(ヒロ)げよと言ふのであつて、當路の人を激勵するものであらう。

詠劍

弱腰(ヨワゴシ)に　なまもの著(ツク)る蝦夷人(エミシビト)。我日本(ワガヒノモト)の大刀　拜み見よ
七重にも手もて曲げなば、まがるらむ。蝦夷(エミシ)ノ國の大刀は、劍(タチ)かは

弓も刀も、鐵砲に對して力ない事を知つたが、尙そこに誇りを棄てないで、ひたすら其鍛錬の技術の神異を述べたのである。此等の歌も、やはり當時としては、稍早いものであらう。なぜなら、漢土の劍戟と比較する事は既にあつても、銃・大砲に對する反撥心が、此歌には十分窺はれる所に、新味が見られるのである。此等もやはり、繪樣に見なしてゐる。思ふに、長崎繪などから、浮んだ想像であらう。彼の歌の時々示す弱點は、調子が一首に一貫しないことのある事である。第一首は、强さが語や句に止つても、ともかく一首を統一する緊張力を示す下句がある。と

ころが、第二首の力弱さは、どうだ。蝦夷の大刀ならねども、へろ〳〵で、幾重にもくづほれてゐるではないか。是は、彼が歌を愛するあまり、「花廼沙久等（ハナノサクラ）」に示した樣に、歌に持つた博い理會と、鑑賞力の圓滿が、却て時としては、實作の障碍をしたことも多かつたのである。萬葉を愛する如く、古今集をも愛し――勿論極めて妥當な選擇が行はれてゐる――文學短歌と共に、短歌樣式の歌謠―神樂歌・催馬樂―のよさをも味ひ知り、六帖や、出所不明の古書引用歌までも喜んで拔いた彼である。かうした造詣と鑑賞力とが、彼に相當煩ひとなつた訣である。だが其は、知識として、又一種の裝飾として、とり入れようとしたのではなかつた。どこまでも歌を愛して居たのだ。歌風はまち〳〵であつても、彼の鑑賞に融けこんでゐた。だから煩ひとはなつた。が、彼を歷代の勅撰集選者や、師範家の如く、歌の枯れ木とはならしめなかつた。此が又彼をして、萬葉調のみならず、廣い面を持つた歌を作らしめたのである。だが、其中には、甚しいのは、狂歌その物を作つたり、堂上風の歌風までも棄てきれないで居るとである。此が、第一流の歌集たる「志濃夫廼舍歌集」の瘤となつたのである。併し瘤は、瘤としてありながら、毫も集全體の價値を破らなかつた。其ほど彼の作物は、秀歌が多く、その秀歌は新し過ぎる程新しかつた。其ほど彼は、亦よく純文學を知つてゐたのである。

劍の歌が重つて出た緣によつて、其傾向について觀察して見るのも、むだではなからう。

人の刀くれけるとき

拔くからに　身をさむくする秋の霜　こゝろにしみて、うれしかりけり

間十次郎光興

血つきたる槍ひきさげて、落ちくさの柴のかくれが　我ぞさぐりし

近松勘六行重母

劍大刀　燒刃に　我と身をふれて、勵ましやりつ。仇ねらふ子を

劍

水奔る白蛇なして　きらめける燒大刀見れば、獨ゑまれつ

竹內篤主軍人の中にある

大刀とりて　いづこへ行きし。あひそめて、まだ日もあらぬ妹を　打すて

劍

福草（サキクサ）の　三尺（サカ）に餘る秋の霜。枕邊におきて、梅が香を嗅ぐ

芳賀眞咲が江門へゆくに

大刀の緒にすがりこそせね。雪霙　ぬれむ旅路に　やりたくはなし

河野通雄が刀佩き、氏名よぶことを公より許されける祝に

許されて　劍とり帶く民の長。民はぐゝみに、ふるへ。利ごゝろ

咏　劍

肝冷す腰の白蛇　吾が魂はうづみ鎭めつ。山松の根に

狛逸也君の、其御名の心ばへを哥に詠みてくれよ、との給へるにより詠める

劍大刀壁によせおきて、胯長にいねつゝ　高き鼾かくらむ

詠　大　刀（長歌略）

――藁屋詠草より――

執術之鈍有丹波、目炎曜　金造之大刀毛、何將爲

其道爾　意籠氐與。劍大刀　利毛、鈍母、術二依許曾

三種神寶――內、一首。

夜のまもり　ひるの守りと、日の御子のかしこみませる　草なぎの劍

（山田秋甫氏編、橘曙覽全集拾遺）

劍に關する歌を、かうして並べると、何の底意もないやうに見える。だが、何となく、曙覽の生活の色々な方面が、胸に流れ込んで來るやうな氣がする。彼は町人ながら、武士との立ち入り多く、早く「拔くからに」の歌などもあり、さうした作物が、藩士の間にもてはやされ、揮毫にはさうした物をと、故らに指定して賴まれる事が多かつた爲に、又自ら其爲の新作が生れたと言ふ事もあらう。ともかく、彼の劍の歌には、彼の一面にある樣な低俗な感情は、すつかり洗ひ流されたやうになつて出るのが常である。常に狃れないだけに、劍といへば、ろまんちっくな、而も潔白な感動の催すことが、屢だつたと思はれる。此外にも既に、とり出して述べた連作にまじつて居るものが相當にある。どれも、漢文學の影響らしい澄んだ響き、爽やかな音覺が、續いて感じられるのである。其替り、變化の乏しい憾みはないでもないが、彼の持つ純な感興が、幾つ出て來ても、ふるびた感じを起させない。

曙覽の持つよさには、かうした和漢兩樣の古典のよい響きを、極度にとり入れて居る點があるのであつた。而も、かうした選擇の行はれる爲には、基礎になるものがあつたに違ひない。彼が、あらゆる當時の文學・非文學の律語で以て表現せられたもの――たとへば、俳諧・狂歌或は、小唄の類に到るまでの相應の教養が、彼の作物には見られる――をとり入れた所から來た自由な表

現や豐富な語彙が、彼の作物をあゝまで、自在ならしめたのであるが、而も其にも、ある根柢があつて、核心のない聲調にうかれてゐるのではなかつた。曙覽の持つ格調の本質とも見るべきものは、何であつたらう。

彼の根本教養になつた所の早期の學問、漢文學である。傳説はあるが、稍明らかでないのは、其漢學の系統である。南條郡大道村――今の南日野村、西大道の法華宗妙泰寺の明導から受けたのが、其手ほどきになつてゐる。後、京に奔つて暫らく兒玉旗山の塾に居たと言ふ。ともあれ、かうした根柢が、凡出來た上に、國朝の古典に、稍遲れて接したものと見るべきであらう。短歌の歴史を通じ、又近く江戸時代の歌人の作物を見渡しても、彼ほど漢文學の味ひ、漢詩文の格調のよさを活して來た者は少いのである。其萬葉を最愛したのも、學統から見て、一往不自然ではない。が、宣長系統には、平安朝文學に對する理會が、進み過ぎたほどにあつた。彼のやうに文學なら、何物でもとり入れると謂つた素質からは、恐らく新古今などに直に趨るべき筈であつた。又、事實においても、新古今を愛した痕も見え、作風にも、新古今調の一面が、強く現れてはゐるのである。だが、彼の格調が、主として萬葉を思はせるものであり、又萬葉を準據とするものであつたことは、此最夙く定つた彼の傾向だと思ふ。恐らく此方面に強い誘ひ（イザナ）となつたのが、平田學に觸れて居た雪江中根氏の力だつたのであらう。本論にも多少此事は述べたのだが、江戸平田塾をのぞいた事などは考へられてゐるのだし、飛驒の國に大秀を訪れて門に入つたことが、愈彼の學を、國學に立たしめることになつたのであらう。だから、廿五乃至卅歳頃までの彼は、倭漢兩方に、心の學を求めてゐた期間にあつたと見られぬこともなからう。學問についでは、彼の書である。彼の書が、師大秀等の影響を引かず、懷素を習うたものと仙石亮博士の認められたのは、誰しも異論のない所である。併し、此が晩年の事であつて、其に先つ四十歳の稍、闌けた頃の筆は、顏眞卿流だといふ。其以前に師明導の俤ある時代、又宣長の書に近い時期あることも言はれてゐるが、其ほど詳しく考へることは、却てどうかと思ふから、仙石博士の説の外輪だけ借りて、明導の書に似た時代から、稍自在を生じ、又再、顏眞卿を經て、張旭・懷素を喜ぶ時期が來たのだと見るべきであらう。彼がかうして書風を改めてゐるのは、人の賴みを受けて書を沽つて、生活の助けとした爲の稽古から來てゐることは勿論だが、其はほんの外側の原因である。彼が倭樣の字よりも、唐樣を愛して、而も其が次第に移つて行つたのである。彼の字は、極めて高く評價せられることもあるが、其は少しく緩めてもよいと思ふ。だが、國學者の中では、ずばりと頭を抽き出して居ることも、事實である。此はどうしても、唐樣を本格とした所にあるのだ。

春嶽の「眞雪草紙」によると、鏑木(?)尙平の福井に來たのは、二度だとある。はじめは、天保七・八・九年頃で、後の度は訣らぬ。が、凡ちようど、曙覽の家を弟に讓つた前後になるだらう。尙平から直接に習うたかどうかは訣らぬが、古風の歌の福井藩に行はれた初めを、曙覽廿五・六・七歳頃からと見れば、其影響は大きにあつたに違ひない。其から後に、卅三歳の大秀入門となるのである。

かうした彼だから、その上、學問よりも寧、創作の方に深く入り立つた彼だから、――學における創見は、可なり鋭いものを見せ乍ら、著述はさほど多く殘さなかつた彼でもある。――其學說も、主義も、凡彼の歌の上に出て來てゐる。だから、歌においても、他人に比類のない「議論歌」とも言ふべきものが出て來てゐるのだ。三井甲之さんの主張した議論を持つた歌に對する自覺は、やはり曙覽の作物に對する理會などが、背景になつて、之を促したものでないかとも思はれるのである。

恐らく曙覽ほど、其持つて居る素質やら、好尙やらを文學に活して來た人は、江戸時代にはほかになからうと思はれるし、其上他人の試みなかつた方面にまで手を伸べて行つたのは、其持つて生れた傾向が、時代の歌の欲したあらゆる方向と、當時においては、ぴつたり叶つて居たからであらう。

そゞろによみいでたりける

人臭き世にはおかざる　我こゝろ。すみかを問はゞ、山のしら雲
梯たてゝ　いつかのぼらむ。短山　高山　神のいますいほりに
人の目に見えぬ高山　短山。神のいほりを覘くよしもが
體といふ　宅はなるれば、天地と　我の間に、垣一重なし
天地の間に　隔なき魂を　しばらく　體の　つゝみをるなり
物皆を　立つ雲霧と思へれば、見る目　嗅ぐ鼻　幽世と同じ
幽顯(?)一重の、蟬の翼もさへず。人の臭もたぬ吾まなこには
美豆山の　青垣山の神樹　葉の　茂みが奥に、吾魂こもる
嚴凝と　神習ゆく斯吾魂　いよゝます〳〵　嚴凝してむ

第一首は、我が身は、此人臭に充ちた世の中にとゞまつてゐるが、心は遙かに、かの山の白雲立つあたりに至つてゐると言ふので、隱士の境涯を詠んだものである。そこに多少漢土風のものゝ感じ方が窺はれる。ところが、二首目になると、山のしら雲の聯想が、大祓詞の高山・短山のい

ほり――廬と雲氣との間を往來してゐる――に繫つて行つて、神のいます處を希求すると謂つた豹變をしてゐる。だから、此は靈魂ばかりが、其境涯に入ることを考へてゐるのだ。三首目は、「覘くよしもが」と謂ふ風に言つてゐるのだから、自身自らせめて窺ひ見るだけでもしたい、と肉體の其境に行くことを考へてゐる。さうしてこゝで、やつと方向が定つて、靈肉の關係を思うてゐる。つまり連作らしい歩み方を蹈み出したのであるが、內容としては、少し無成算な卽吟の嫌ひがあり過ぎる。さうして、窺ひ難き神の世界も、靈魂が自在な境地に達すれば、直に一つに觀じることが出來る。此天地と、我と一體だといふのである。天地卽神と言ふ訣だが、大分の飛躍がある。其には、抽象性が非常に加つて來てゐる。此は漢學式な感じ方であり、知識が具體化を疎かにしてゐるのである。此一首、如何にも儒家の口うつしであつて、又同時にさうした成句成語の力によつて、說明を超えて認容させようとしてゐるのである。勿論曙覽が、意識して、こんな態度をとつた訣ではないが。「天地の間に」の歌は、かうした連作の一首として、聯想の範圍の局限せられて居るのでなくば、下句の變化が相當に働いて、此歌を救ひさうに見えるのだが、「天地の間に隔てなき魂」といふ句の持つ抽象性と、其句の間に行き屆いてゐない觀照が、どうしても邪魔をする。さうして、連作としては、姑らく肉體にこもる靈魂だから、天地と一體だと言ふやうにも感じ、さうあるべき魂が、苟めに肉體に拘束せられてゐるのだといふ風にも、とれるやうになつて居る。かうしてやつと、感興は高まつて來、其によつておし出された表現が、びつたりと內界に合致して來うとしてゐる。其が「物みなを」である。「立つ雲霧」といふのは、之を無視してゐることでもなく、煩しがつて居るのでもない。神の世界に立つ「いほり――人界遠い世界の雲霧と觀じるといふのである。「すべての現象を直に天上界の無心の自然と觀ずる時は」と言ふのである。さうすれば、常にうるさく、監視し、聽き耳を立てゐる人たち其ものゝ動きが、神の世界の現象なる雲霧と一つに感じられて、心を遮るものでなくなつた。かうした瞬間のある直觀を詠んだのである。連作中の一首としては、佳作である。見る目・嗅ぐ鼻など言ふ皮肉味を帶びた語も、すべてさうした嫌ひを振ひ落してゐる。卽、今まで「見る目嗅ぐ鼻」――地獄王廳にある。――さうして又、此が俗間の語として、さうしたうるさい人々を一擧に蔑視するやうな氣分を持つて來てゐる――と感じてゐた、我が拘泥してゐた心を、輕くあしらふことになるのである。皮肉でなく、皮肉から出て、其皮肉の低卑性をも征服して、その低卑すら認めることになつた。唯、連作としての位置を放して見ると、上句が幾分曖昧になり、從つて下句も、活潑にはたらかなくなるのである。次の「一重の蟬の羽も支(サ)へず」は、微細な感動を表した點に、

彼の觀照力の深さを見る。だが幽顯と謂つた、生硬な語句から導かれては、其すら却ておもしろくない比喩のやうに感じられる虞れがある。殊に四句が、何と讀むにしても、くどい說明――それから嫌な構へらしいものを感じさせる。さうして又、「わがまなこには」で、彼以外の人には容易でなさゝうな直觀が閃くのである。假りに、第五句を掌に掩うて、別に之に、新しい句を据ゑる試みをして見るがよい。「……羽も支へず。……わがまなこには」此以上の句が出來ようとは思はれない。結局、かうしたところには、人間にしてあまりに人間であつた曙覽の體臭が、どうしても出て來るのである。之を排除せねばならぬ歌になると、愈其が顏を顯す訣なのだ。こゝまで來て、更に自在を得て行きさうな曙覽の心も既に、國學者の心になり過ぎたのである。今少し、天界に放つておきたかつた心である。其が、其間にあつて、學說に行きふれてしまつたのである。「美豆山の」「嚴凝りと」が、其である。澄みきつた魂は、わが魂であると同時に、聖なる奧山に鎭る魂である。かうした一如觀を持つた訣であるが、平易で、外向式な修辭が、さうした刹那の痛感を、人に持ち來さない。唯ことわり歌に近い効果しか、あげないのである。だからかうした感激を、そのまゝ詠まれるのもよかつた。要するに、實感と表現とが、背反(ハダヽ)になつたのが、此歌製作時の感興の固定を示してゐるのだ。だから次の歌は、神道の哲學としては、此歌ほどの深さを持つたものは、さう〳〵はない。だがさうした概念を述べた替りに、情熱はさつと退(ヒ)いて行つてしまつて居る。「いよゝます〳〵嚴凝りしてむ」には、曙覽自身の愈深まり、ひそまつて來た幽なる心は感じられるのだが、其は條件だけであつて、人の心を搖(ユラ)ぎ響かせる――響きではないのである。「この我が魂」とまで見据ゑて居ながら、感激なく說明を列ねて行つた上二句が、とりわけ煩ひをなしたのである。

かう言ふ風に、連作の製作順を追うて辿つて行つて、彼の心の移動が極めてよく訣る。かう言ふことは、他の歌人には、まづ望まれぬことであらう。此點だけから見ても、志濃夫廼舍歌集の、他と撰を異にした樣々のよさの出所を、思はせられるのだが、その中、第一に見るべきは、製作態度の端然たる點である。觀照が、表現と叶つてゐるかどうかゞ、常に大切であるが、表現はたとひ逸れて居ても、觀點の痕がはつきりと見え、而も其が極めて確かなことに於いて、彼以上の人はさう〳〵はないことを思はせられる。だから、之に感興が隨伴すれば、どのやうな作物が出來るか、測り知れない、かう言ふ氣がする。事實、曙覽の作物の優れたものは、さうした條件の整うて出來てゐることが多いのである。

所謂議論歌といふべきものも、こゝまで、彼は進めて來てゐたのである。さうしてある場合は、

ある程度まで成功してゐる。其事については、いつか述べる時が來るだらう。今は、其側の敍述は省きたい。

彼の神道觀は、決して淺いものではなかつた。凡こゝまで入り立つた人は、國學者にも多くはなかつた。此は偏に、神道の論理を闘くものとして歌の表現によつたことに力があるのである。だが、同時に、多くの國學者がさうであつたやうに、彼にも彼相應に、儒學の印象が、神學觀の上に出てゐることは爭はれない。其とさうして其上に、其を超えて出た純粹な古代論理が、彼には見られるのである。

彼の、漢學・漢文學の影響を止めてゐ乍ら、國學者或は歌人としての自覺を示したものは、其著述に散見してゐる。こゝには、歌と詩とに關する一條を拔いて、彼の理會の博いことを告げたい。「園爐裡譚」の末段である。

小澤蘆庵翁の歌に、「いにしへは、大根（オホネ）　はじかみ　韮　茄子（ナスビ）、瓜のたぐひも、歌によみけり」といへるは、歌をむげに狹くとりなし、古き集どもに例ある物の外には、題もたやすくはものせず、なべて海月なす筋も骨もなきものに、讀みそこなひ來れる惡癖を看破せられたるものにぞあるべき。……近き頃、廣瀨旭莊といへる人が、享保・元祿のころほひの詩人の、琴柱に膠すと言ふやうなる風體をあざけりて、白雲明月ノ句、多於魚卵繁（シトニ　キヨリテ）いひたりしも、蘆庵翁のいきどほにひとしき心ばへと見えたり。何れの道にも、才の活かざるばかりくちをしきものはあらざりけり。かく寐言のやうなることのみよみふける哥人の多きより、すこしも學才ある人などは、歌をたゞはかなきものに思ひうとんじ、たけきことゝは、詩にのみ赴くめり。然（サ）て世を經るほどに、歌は文盲なる者の手に落ち入りて、いよ／＼狹く、心淺きものになりて、詩の人情・世態・雅俗にわたりて言ひ通るに、けおされむとさへするに到れり。哥人とあらむ者、寐きたなくする目をよくさまし、此に憤りを發（オコ）し、思ひを凝して、よみ口の鋒を鋭（スルド）にし、其事に隨ひ、其物に因り、彼方此方のきらひなく、幽玄・洒落・麗妍・澹泊・殷富・凄涼・勇壯・溫柔・變化自在の臂を張りて、毛唐人の糟粕嘗むる詩人の陣を突き崩し、戎語（エビスコトバ）轉りちらす舌引き拔きくれむと、國風の旗さし建て、古言の鼓うちひゞかせて、後（ウシロ）向かじ、背見せじと、進まざらむや。勇まざらめや。

二　壯年の境涯

「……さいつとし、天の下のまつりごとあらたまらむとせし頃は、篤しき病ひに煩ひて、今はのきはと見えたりしかど、誠ぬしが都よりの還さに、立ちよれるを引きとゞめて、衾手づからかいのけて、ありさまどもたづね聞き、今日こそ身のいたつきをも忘れたりけれ、と喜ばれしとぞ……」

志濃夫廼舍歌集のはじめて世に出たのは、明治十一年であつた。恐らくその開板に便宜を與へたと思はれる近藤芳樹の書いた序文は、短歌の本質と、橘曙覽の作物の價値とを、此時代としては、よく理會した書き物であつた。芳樹に此依頼に行つたのは、曙覽の門弟太政官主記佐藤誠である。其で、此話をしたのも、右の佐藤氏であつた。

曙覽の長子井手今滋さんの書いた「小傳」—橘曙覽全集—には、「如斯古來未曾有の大御代に遭ひながら、眼前復古の盛儀大典を見奉るに至らず、況やかねての抱負も、將に達するに向はむとして、今日はかなくも世を去ること、返す〳〵もくちをしけれとて、切齒瞑目せられたり」とあつて、理想せられた大丈夫の形が出てゐる。

橿原の宮に還ることは、國學者の等しく望んで居た黄金世界であつた。さうして其が實現せられるに近くなつて、死んで行かうとするのだ。歡びと慨みとが、心を搖つてゐた樣子も察せられる。「況やかねての抱負も……」以下の述懷は、若い井手氏の心に、さう言ふ風に印象したのであらう。さうして、此歌集の開板に到る十年の間は、國學者の胸に殊にさうした氣概の溢れてゐた時代だつたのである。

曙覽の内には、平田學の影響から來たものがなかつたとは言へぬ。又篤胤等を尊重した痕も明らかだ。彼の庇護者と見るべき福井藩の重臣中根雪江は、平田門に入つた人である。又門人芳賀眞咲（矢一博士の父）に與へた歌——篤胤の書に書き添へよとの依頼に、

これやこの　書看ふければ、夜七夜も寢でありきとふ　神の筆あと

などを考へると、一部の國學者が、平田派に持つて居たやうな敵意などは感じられない。だが、此派の學者のやうに、理想國を空想する樣な考へなどは、持つて居なかつたと見る方が、正しいのではないか。この一條を外にして考へると、此歡びを見果すことの出來ぬ身のかひなさを、歎いた樣が、如何にもよく納得出來る。

誠の方の傳へになると、更に適切に曙覽の心が現れてゐる。今までの調査では、曙覽の勤皇の情熱に燃えてゐたことは訣るが、勤皇運動に携つた痕は見られないのである。

若し倖に餘命があつたら、松平春嶽の推擧で、明治政府治下の官吏・助敎・宮司のいづれかになつて居たかも知れぬ。併し其も亦、おのが性向に合はぬものとして、斷つて居たかも知れない。

ともかく町人出の人であつた。福井の由緒古い町人の家に生れた彼であることから、考へはじめねばならぬ。

幕末の志士の中には、百姓・町人の舊家から出たものが相當にあつた。彼等は學問をして、御家人の生活と、自分等の生活との岐れた理由を、知ることが出來たのである。だから、新しい感激深い運動に携ることが、彼等を士分の者同樣の自覺に据ゑたのであつた。だから、若し曙覽が積極式な生活法を採る人だつたら、さう言ふ機會は幾らもあつた筈である。現に天保の初年、二十を越したばかりで、京都に奔つて、兒玉塾に入つて居る。又二十八歳の天保十年には、江戸に遊んでゐるのである。平田鐵胤門その他、皇漢の學徒の實行派に近寄る機會もあつた筈を、事無く歸鄕してゐる。偶然の機緣が彼に迫らなかつた事もあらうし、又元々さう言ふ激越した質を持たなかつたものとも見られる。

それに第一、彼の育つた福井・武生は、幕末動亂の時代をわりに、家中は靜かに經過した。藩侯や、二三の重臣の上には、事はあつたが、藩士の脫走して國事に奔つた者なども、まづなかつたと言ふことが出來る。此氣運の間に、曙覽は成長してゐたのである。だから思想として、知識として、すべて國學の先輩の說く所は包容し、又興奮を感じた人であるが、之を實行に移さうとする人物ではなかつた。それに、今一つは、生活上の原因があると思ふ。三十歳を過ぎて、彼は家を弟に讓つて出てゐる。最若く見つもつても、廿九又は三十、遲く考へて見ると、三十三以後のことである。町人の子、殊に家の後取りが、學問に身を入れると言ふことは、當時の人の見解からすれば、一種の漂浪癖がついたのと同じことである。若し若い彼の京都への出奔が、町人出の志士を見習うてのことゝすれば、尙の事である。尤さうした見方も、全く出來ない訣ではない。その當時賴つて行つたのは、賴山陽門下の兒玉士啓であつた。少年よりの師匠明導の指圖によつて、詩人兒玉旗山に就くことになつたとして、ともかく家人らの解釋の中には、此頃京都における學徒の氣風についての虞れが籠つて居なかつたとも言はれない。だが此點はすべて、今の處まづ、平凡に家業を棄てゝ遊學した者をひき戻したものと見るのが、當を得てゐるであらう。

儒學その他の立ち場から、當時の風潮を吸ひこんで、勤皇の志を抱くことはあつても、まだ學問にも文學にも、自覺のなかつたのが、二十五歳前の彼であつたと言へよう。

松平春嶽は、福井に古學・古體歌の行はれるやうになつたのは、天保七・八・九年頃の事かとしてゐる。年月が漠としてゐるが、細かく數字をあげてゐるのは、却てわりに記憶が離れ過ぎて居ないことを示すのだらう。鏑木尙平――姓氏覺え不申とあるが、山田秋甫さんは、鏑木姓と聞いたと註してゐられる――と言ふ人が遊歷して、こゝに新しい種をおろしたものだとしてゐる。中根雪江・平本良載・渥美新右衞門等が之に學んで、學も歌も、其感化を受けたとある。春嶽自身福井藩勤皇の導きをなした者は、右尙平の古學・古歌の運動であるとしてゐる。回想記の性質上、多少自身の經歷に集注して考へ過ぎる傾向もあらうが、大體は頷かれる。其以前に全く復古運動の芽生えもなかつたとするのは、時が降り過ぎるかとも思はれる。が、福井藩の動き方から見ても、立ち上りが遲かつた理由が、こんな處にあると言ふ理會もつく訣である。かうした中根靱負が江戸詰め中、平田篤胤門に入り、勤皇の志を立てるに至つたと記述してあるのも、順序は叶つてゐる。中根氏三十・卅一・卅二、曙覽廿五・廿六・廿七の頃、尙平福井遊歷があつたのだから、篤胤沒年の天保十四年までは、六年以上の年數があつた訣である。

「夫よりして、橘曙覽等も、雪江の奬勵によりて、古學をなす。田中大秀の門人となりたり。曙覽の功も甚多し。故に和歌の道に功勞ある者は、渥見新右衞門・中根雪江・橘曙覽・平本平學……福井にて勤王の志を立てたるもの、また勤王の起りしは、外になし。中根雪江一人也。勤王に功勞ありし人は、此人の上にいづるものなし」

中根靱負を間にして、曙覽を見て居た春嶽は、恐らく過不足なく此二人の交渉を見たであらう。天保七・八・九年、彼廿五を過ぎて、學問・文學の覺悟が定まつたことが窺はれる。さうして其先導者となつたのが、中根氏だつたのである。此樣子は、雪江自身の「中根師質行狀」にも書いてゐる。

「余は始の程こそ、先達めきて物しつれ。暇なき官路に老い朽ち果てにたるを、翁はたゆまふ事なく……今はしも仰ぎ瞻るさへ目ばゆかるを……」

此時以前既に相當の造詣を示してゐた曙覽の學問・文學が、福井藩の士人に認められ、愛せられてゐたに違ひない。さうして其等の人々と文雅の交りをしてゐる內に、此まで考へなかつた高い理想が、持ち來されたのであつた。今までの文學遊戲の上に、崇高な目的が見出されたのである。古歌を以てする古學の道は、更に古義神道に到らねばならぬといふ事であつた。從來はかう

した目的を忘れた末梢の遊戯であつた。之を悟つた士人の中に、最進んだのが、中根氏であつた。國學者の理想では、かうして、福井藩に入つて來たのである。

かうして見ると、福井藩における勤皇は、文藝復興の清純な歩みから出たもの、と見てよい。少くとも、復古の情熱は、古學のつきつめて尖鋭になつた古歌の形を以て、燃え立つて來たのであつた。

自覺後

曙覽の江戸に出たのは、廿八歳、天保十年のことであつた。勿論江戸は此時限りでなく、恐らく此前にも、武生の伯父の使ひとして行つたことはあつたものと見てよい樣である。學問に、ある自覺を得て直後の東下だから、たとひ目的は何であつても、受けて來た影響は深いものだつたに違ひない。其に遊學の爲といふには、あまり短日月の事らしいから、彼の覺悟には根柢は出來た旅だつたにしても、學者の門を叩くとか、道を聽くとか言ふ目的ではなかつた、と思うてよい。なぜなら、一度でも學者の門を訪れゝば、既に入門したことになり、師弟關係の成り立つのは、當時の姿であつた。學匠はその門人帳にも記入しようし、又曙覽自身、誰の門を訪れたと言ふことを誇つて言はぬ筈もない。思へば、此前年の九月には、田安齊匡の子慶永が、福井藩主松平齊善の嗣子となつて、翌月封を襲いだ。此が春嶽である。さうして此年は、在府してゐたものと見られるから、從つて中根以下の人々も、江戸在番であつたであらう。さうした機會に、曙覽は江戸へ出る都合が出來たのではあるまいか。此年、曙覽の出た正玄家等の橘七屋敷の宗家橘宗賢―歴代宗賢を稱へる―家の再建があつた。前々年城下火事で燒けたのであつた。藩侯から松材あまた下して、此國の名族の家を復興させようとした。宗賢家では、新築した家を賜松館とつけ、又曙覽に囑して歌を詠ぜしめた。

此二首の中、前一首は「萬代までも榮えたらなむ」と言ふ風な舊風のものである。後のものには、「松の棟木は、君がたまもの」と謂つた風で、後の自在な歌口の窺はれる所がある。此まで解釋せられた曙覽の性格觀からは、稍外れる樣だが、或は、昔からの由緒を申し立つる陳狀役に選ばれて、江戸へ出たものと思はれぬでもない。賜松館には、彼の關係あつたことは、其記文の間にも見えるやうだ。

だが此歌などは、曙覽の自選になつた志濃夫廼舍歌集には出て居ない。此は明らかに彼の態度を表してゐるものと言へる。つまり自覺以前の歌は一切棄てゝ顧みなかつたと言ふことである。嚴

重に謂へば、彼に記念すべき天保九年・十年を以て初めとすべきであらうが、尙少し外的事情の之を限定するに足るものが乏しい。其で、彼自身飛躍のあつた年と言ふ考へから弘化元年の飛驛入りを以て、境としたものと察せられる。

此年以來、彼の學問は傳統あるものとなつた訣である。今日の吾々にとつては、學問と文學との間に、さほど密切な關係を考へることは、不自然である。併し前代の人にとつては、歌は卽學問であり、尠くとも學立つて歌はじめて正しとしたのだ。宣長門の田中大秀に入門したことは、國學者としての世間資格を具へることになつたと共に、彼の歌も、傳統正しいもの、と自信してよい訣になつた。

此前年―天保十四―閏九月には、平田篤胤が死んでゐる。若し、今數年壽命を保つて居たとしたら、彼の門人帳には、曙覽の名が書き加へられることに、なつたかも知れなかつた。

篤胤の死んだことは、彼に大秀入門の決心を堅めさせたもの、とも考へることが出來る。八月大野路を穴馬越えして、美濃郡上(グジヤウ)に出、其から高山へ出て、其處に宿を定めて、大秀の千種園を叩くに到つたのである。此道は、越中から東山道へ出る近道であるから、飛驛から越中路へ來る人も、又富山からする江戸往來にも、多く之を取り、曙覽も若い武生時代に通つてゐるのである。

大秀も亦、此道を越えて、福井へ往來しても居るのである。其道を昨日行つて今日還ると言ふ風に、福井には戻つてゐる。

「藁屋文集」の「奉レ齋二祀本居櫻根大人一而於二大前一祈白詞(ノミマウス)」によれば、八月頃に、宣長大人の教子田中翁の許に行つて、長い疑問を問ひ訊し、更に櫻根大人の謚號を書いて貰つて歸國した。さうして其後「日異爾(ヒノケニ)御前事仕奉(ノ)(リ)」とあつて、九月廿九日の祥月命日に祀りを營むよしが、唱へられてゐる。さすれば、其高山滯在は、極めて僅かな日數であつたに過ぎまい。さうして其間に、白雲居の歌會に列り、又千種園で歌を詠んで居る。千種園は大秀の家名であるから、白雲居は別人の宅であらう。

此で正式に刺を通じて、入門の禮を取つたことになるのである。而も昔の人の心は、かうして、二重の師弟關係の溫さを持つたのである。宣長の弟子である所の大秀に事へることは、同時に宣長に事へることである。單に大秀を間に立てゝ、宣長を崇めてゐるだけではないのである。其と共に又、大秀に事へることが主となつて、宣長を思ふ心は閑却せられてゐる訣でもなかつた。結局は、宣長の開いた學統一筋、どの點にも中心を捉へることが出來たのである。此は、先にあげた祝詞及び、「師翁の御許に、飛驛國に物學にまゐでゝよめる」長歌との間に、今人には矛盾に

感ぜられさうな、又功利式に考へられさうなものあるを虞れて言ふのである。

「……まな柱　學びの親と、天つ水　仰ぎまつりて、大船の　賴まむものと、むらぎもの　心は思へど、飛驒人のうつ墨繩の　速けく往きてもとはず、玉くしげ　二年三年、もみぢ葉の年を過ぎ來て、……牡鹿なす　膝折り伏せ、鵜じもの　うなねつきぬき、おくて田の　遲れし我とめぐみまし、あなゝひまして、教へ子の列につらなべ、ときさとし教へまさねと、しづの男が假り菴のいほに引く板の　たゞひたすらにこひのみまつる」

と熱情が歌はれてゐる。だが其と同時に、大秀の歿した時の「師翁のみまかり給ひけるを悲しみてよめる」歌には、

「析鈴（サクスヾ）の五十鈴のすゞの　鈴屋の大人の命の……學子（マナビコ）の兄とさしたる　春べ咲く　藤垣内（フヂノカキツ）の本居の其翁（大平）しも、懷（オム）がしみ、稱へましけるそこをしも、あやに尊み、そこをしもあやにかしこみ、まな柱　學びの父と、あらたまの　この年ごろを　泣く子なす　慕ひまつりて、うるはしみ思へるものを、白玉の五百箇（イホツ）つどひの緒絶（タヤ）えして……」

此で見ても、學統に對する愛執が窺はれるでないか。

かうして鈴屋の正統に列る一人として、自らも覺悟が出來、人も認めることになつて、はじめて晴れて學を講じ、弟子を取ることになつたのであらう。其なればこそ、弘化三年生家を離れ、足羽山の黃金舍に移ることになつたのである。勿論其以前にも、享樂態度から、次第に本氣に學問に深入りすると共に、弟子をも取るやうになつて居たであらうが、此頃になつて其だけの決心も、ついたものと思はれる。

從來の考へ方では、彼の生家が福井の舊家であり、富裕な紙商であつたのを棄てゝ、異母弟に讓つたと言ふ點に、一つの力點を置くからして、家を出る年が問題になつて來る。だがかうした事は、彼の性格もあり、又事の自然の推移もあつて、自ら解決して居た事であらうと思ふが、曙覽傳を作る段になると、やはり一つの事件である。どうしても、年月を明らかにしようと言ふことになる。

志濃夫廼舍歌集は、この意義において、ある處まで徹底した態度を採つてゐるやうである。卽、此新しい覺悟を發した年の作物を初めに据ゑて、以後年代順にした樣子に見えることである。第一集「松籟艸」の卷頭三首は、足羽山に住みはじめた頃のものと言ふので出したのである。さうして、集の名も、その第一首「……軒の松　あらしと言ひて、吹きかへしてよ」から取つたのだ。此は彼にとつて、重大な時期の記念として、とり立てゝ掲げ出したものと言へる。だから、

飛驒入り後に出來たものであつたとしても、之に出して置いた理由は訣る。さすれば、其次にある

飛驒國にて、白雲居の會に、初雁

妹と寢る　とこよ離れて、　この朝明　鳴きて來つらむ初雁の聲

同じ國なる千種園にて、甲斐國のりくら山に雪のふりけるを見て

旅ごろも　うべこそさゆれ。乘る駒の　鞍の高嶺に、み雪つもれり

が、順序として最初におかるべきものであつた。歌柄から言つても、さうである。だから、出來た順序としては、其次の「汐ならで」の歌に續くのである。

さすがに曙覽だけに、短歌としての特殊な鑑賞法から見て優れたものは、勿論多い。が、一般の文學として、詩を十分に持つたのは、此二つが尤なるものである。その興奮と感激とが、如何にも高い風格に包まれて現れてゐることを見るであらう。彼の心が張り充ちてゐたのである。彼の意氣の、昂つてゐたことが察せられる。

私は、萬葉ぶりの歌に就いて、平凡な解說をしたい。萬葉集以後、語どほりの意味における、萬葉ぶりの歌は出て居ないのである。唯わりあひに、萬葉式な風格を感じさせる歌の持つ格調を、其だと言ふばかりである。だから嚴密に言へば、古代短歌に似た情調を生じる要素を持つた歌と言ふに過ぎない。だから、記紀の短歌に近いものも、亦古今集中の「よみ人知らず」にあるやうなものも、ある後代風な歌の間に置く時、其が復古的だと言ふ感じを抱かせると共に、萬葉ぶりだと、判斷せられるのである。事實如何に萬葉に親しんだ學者・研究家・歌人でも、萬葉の本格式な調子なるものを、的確にとり出すことは出來ない。唯、萬葉集中の歌を斥(サ)し示すより外はないのであつて、集以外の後代の作物から、萬葉式なものをとり出すと言ふ段になると、明らかに多くの場合は、他の雜多な歌集の要素を含んだものを探りあてる事になる。彼等の前に既にある古典作物以外には、其古典に似よつたものを適切に示す訣にはいかないものなのである。江戸時代の作者の萬葉ぶりだと謂はれた作の一々について、自分の感じるものと、其自身が持つてゐる歷史式な姿とを比べて見れば訣ると思ふ。たとへば、賀茂眞淵の作物の最萬葉式なものを見ても、其が歷史風眞實からして、萬葉式だと謂へないのである。後代風なものゝ上に、若干古代短歌の風格を作る要素が加つて居て、其が殆歌全體に、瀰漫してゐるやうに感じさせて居るに過ぎないことが多いのだ。まして其系統の作家で見れば、もつと甚しく、我々の漠とした臆斷が、近代調に僅かに加つた古態を、歌全體の上に擴張してゐることを覺るであらう。溯つて源實朝の萬

葉ぶりだと謂はれる二十首未滿の金槐集中の古調のものについて見ても、其は明らかなことである。極言すれば、單に調子が古風に張つてゐると言ふやうな點に歸するものを捉へて、さう言つてゐることが訣る。尤、さうした歌の作られるのには、萬葉集を讀んだ影響が、十分に見られる。だが、さうして出て來るものは、萬葉の作物の感覺に刺戟せられて出た、ある近代調と言ふことになるのである。江戸の田安宗武ほど、獨自の萬葉調をなした人も少い。其にも繫らず、彼の作つた歌の一つ〳〵は、萬葉と近代歌との間に、ある融合點を作つてゐたに過ぎないのである。だから、萬葉集にあるが爲に、我々は一つ〳〵の歌を萬葉正調としてゐるが、若し其等の作物が早く逸散して萬葉集から離れてゐたとしたら、誰が萬葉集の殘りの歌と比べて、萬葉調自身だと言ふだらう。嚴重に言へばさうである。だから、多くの場合は逆に極めて散漫な立ち場から、萬葉ぶりを感じてゐるに過ぎないことが思はれるであらう。

新古今調についてもさうで、彼時代前後に於いて、たけのすぐれたものを賞揚し、すがたの整うたことを喜んでゐるが、かうして出來た新古今風の代表式なものゝある種の作物になると、直に萬葉ぶりだと謂ふ人のありさうなものがある。つまり格調の緊密な點に、さうした判斷が起るのである。

曙覽の歌についても、此は萬葉調、此は新古今調或は堂上風などゝも言はれようが、さう言ふ事は實は、感じだけの問題に過ぎぬことが多い。併し概して萬葉風な氣分を持たすとか、古今或は新古今式な情調を起させる歌風と謂ふものはある筈である。だが、一々の作物について、細かに觀察してゆくと、さうした知識は焦點を失うて、自由な姿に戻つてしまふことを考へて置かねば、歌は幾らでも、問題が重つて起るだらう。

「いもとぬる」「たびごろも」の二首なども、さう言ふ歷史的な考へから見れば、萬葉ぶりでない調子を、交へてゐることは事實だ。新古今風だとさへ言ふことも出來よう。殊に、第一首の方の上の句「いもとぬるとこよはなれて、このあさけ」と謂つた緊張感は、寧新古今風の印象を含んでゐないとは言へない。併し此歌の近世風なはなやかな格調の上に、若干の素樸感を加へてゐるものゝあることは事實だ。我々の一つの詩の形式要素から受ける印象は、複雜に分解せられるのである。「とこよ」のきつかけを起す、「妹と寢る」であり、又常世と言ふ單語であり、「この朝明」と言ふ寧、古代歌の類型を思はせる語である。かうした語の分散が、かの中世風な調子に綜合せられて、さうした形式要素を、新しく知識要素を以て組み替へて居るのである。さうしてそこに、新古今でもなく萬葉でもない――謂はゞ古學者調の詞づかひが出來たのである。併し人

は、直にそこの混迷を見逃して了ふ。さうして言ふかも知れない。曙覽なればこその萬葉ぶりと。だが又次の「なきて來つらむはつかりのこゑ」を見る。此は歌のみが要求してゐる緊迫感であつて、此生活にとつては、かうしたひきしまりは必要でないのだ。寧、生を遊離した調子と言ふことが出來る。勿論萬葉にも、之と傾向を同じうし來つた調子の獨立した歌がある。だが其が此歌の救ひにもならぬし、又同時に此歌を萬葉ぶりと言はせる理由にもならぬのである。併し、元々此歌自身には、旅を悲傷してゐるものでもない。唯雁をして適切に詩を形づくらしめればよいと言ふ位の覺悟をしか含んでゐぬのだ。さすれば、當時の生活條件を注入する必要もなかつた訣である。唯、常世の雁の遙々來たことを述べれば足つたのだ。不必要な程度に緊張した調子も、單に歌としての第二の約束を果したといふことで滿足することになるのである。此不必要を必要とするのは、歌の持つ固疾であつて、萬葉にも、常に見えるものである。だが、此が萬葉ぶりであることの說明にはならない。私どもにとつては、此下句の張りが、ある卑しさを包藏してゐるやうにさへ感じられる位である。萬葉集にも、かうした躍り調子の緊迫したものは、さうないのである。まして四季雜歌の類の詠物詩は、もつと靜かな調子を持つてゐる。けれども、此だけの事實を、曙覽は勿論、白雲居の歌會に列した——だらう——大秀その他の人々は、萬葉正調と感じたかも知れない。さうした見方は、勿論後世もする人々があるであらう。其にも繫らず、私も尙之を、多少萬葉要素を持つた調子と見る。其は彼の素養である。經驗である。かうした素材を、かう纏めて來たことは、此歌の上にのしかゝつて、讀者に感じさせないでは居ないのである。かう言ふ爲立ての歌が出來るといふことは、彼の古學である。其が發動して、常識風に言へば、萬葉ぶりである所の、古學者歌の新古雜糅の作物が出來たのである。之を萬葉ぶりでないと言ふことも出來るが、さうした立ち場を認めなければ、所謂萬葉ぶりの消えてなくなることも、考へねばならぬ。畢竟、萬葉を中心に古代の短歌の綜合觀から出た文藝復興調とでも命けてよいものであらう。この歌の格調に命けることは如何ともあれ、歌そのものは、志濃夫廼舍歌集中でも最油の乘つた歌であることは事實である。此作物が內容において優れてゐるといふより、感興が飽和の度に達してゐる點である。初めて師の門を叩いて、此だけの作物を示したとすれば、恐らく千種園を圍る多くの人々が駭いたことは察せられる。此は、八月の事だから、既に雁の渡る時季だつたのだらう。又現に鳴き渡らなくても、「初雁」は詠じもし、題に出されても不都合ではなかつた。此と日を接して作つたと見える「旅衣」の歌は、「千種園にて」とあるからは、師の前で作つたものに違ひない。八月雪をかうむる乘鞍嶽を望んで作つたものであらうが、如何に

高山國でも仲秋の歌としては、少しいき過ぎてゐる感じがある。其頃特に冷氣甚しかつたのか、或は遠山の雪から導いた誇張であらうか、或は此高山滯在は九月上・中旬に跨つたのかとも思へる。思ふに、曙覽の師を訪れたことが、弘化元年秋一度に止るものとも思はれぬから、他のをりの歌を序を以て列ねたか、とも考へられる。がまづ、同じ時のものと見て、最適切な條件に置いて見るのがよからう。だから、まだ殘暑を感じる頃、家から用意した薄着の肌のひやつくのが甚しくなつた時分と見られよう。さすれば、山の雪と、地上のうすら寒さとが不自然な對照にならないでよい。此歌も、嚴格な萬葉ぶりではない。でも、從來の歌風の上に、萬葉後期の物の純粹な吸收が行はれゝば、かう言ふ清純な調子になるだらう。殊に下句は、明治における新派萬葉ぶりの初期の一つの目標とも見られる姿である。結局さうした萬葉ぶりは、曙覽をとほしてとり入れた、萬葉の現れなのである。「旅ごろもうべこそさゆれ」の單純な反省もよいが、「乘る駒の」は、實際馬の背にあるやうな印象を作るのが、問題だ。勿論、枕詞・序歌にはさうしたものは多いのだが、後代人の作る擬古體の文學は、さうした混迷のないやうにせられねばならぬ。或は山の名、乘鞍をかうして割つて、よみ込んだものとも解せられるが、鞍嶽とも言はれた山だから、やはり單なる枕詞に用ゐて居るのだ。其だけ緊密を缺いてゐる訣で、こゝが著しく浮いて響く。其が此第三句を無用に緊張した調子に作つて居るのである。併し、此が置かれてなければ鞍の高嶺の語が露出して、所在ないものになつたでもあらう。要するに、枕詞の選定に問題があるのだ。此二首を比べると、當代の本格の調子は前者にあるが、後代の調子を暗示し、靜かながらある刺戟になるものを殘すものは、後の方であると言へよう。此歌を作つた當時ならば、或はなかつた筈の誤りがある。「甲斐國のりくら山」とした序である。乘鞍嶽は、高山からは東に當つてゐるのだから、信濃・飛驒に跨つてゐることは紛ふべくもない。其に亦、甲斐の山と言へば、富士山すらも見えぬ處である。年月立つて後、記憶にたよつて整理し、歌の順序も立てゝ行つたものと思はれるだけに、かうした錯誤のあるのは訝しむに及ばない。と共に、歌も製作年月も、必しも正しく年を逐うて列ねられたと信じることも、出來ないと思ふ。

ともかく此二首は、曙覽の自讃歌(オモテウタ)でもあらうし、又新風に蹈み出した記念でもあらうから、まづ卷頭歌のつもりのものと見てよいだらう。後世から見て、相當意義ある事件も、當時平常な生活の續きとして經驗してゐる間は、まことに平凡な家常茶飯事として看過すものである。曙覽の、足羽山(アスハヤマ)移住の年月も、さうしておほよそになつて來たのかも知れぬ。足羽山移住を傳へる弘化三年に生れたのは、長男今滋である。其今滋自身の記憶すらも、目前に見たのでなかつた爲か、黄

金舍の事は朧である。尤この井手氏の母直子刀自は、大正二年百歳の長壽を終へたのであるから、記憶を新にする機會は度々あつた筈である。今滋の生れた年と足羽山移住と、並び起つた年であつて見れば、刀自の胸に浮ばない筈はない。而も明治廿七年撰つた墓碣銘—依田百川—は、弘化三年説であつて、同時に前々年、大秀に入門した事をすら書いて居ない。此文「二十七年來求二余文一。余素不レ識レ翁。閱二其行狀一、始知二非凡人一」と書いてゐる百川の記憶から出たことでないことは明らかだ。今滋の考へからとすれば、直子刀自は、「今年八十、健康不レ減二少時一云」とある。其後九年明治卅六年九月東京富山房から開板した『橘曙覽全集』には、今滋の書いた小傳が附いてゐる。刀自此時年八十九、尙往事を忘れ盡しても居なかつたであらう。而も此文には、天保十年二十五歳—實は廿八歳—で江戸から還つて後、決心して家産を弟宣に讓つて足羽山に退去し、その後田中大秀に就いた。弘化三年としての記事は、仁孝天皇御大葬儀拜觀の事を書いてあるばかりだ。墓碣銘と、小傳とでは大きな矛盾がある。此は二文の出來た九年の歳月の間に、記憶が革つたものであらうか。通常ならば、前年の誤記を訂すといふ事はある。其が却てとりとめなくなつて來ると言ふのも、如何なものであらう。我々は理としては、小傳を信じるのが、一番正しいのである。だが、此文には江戸に出た年すら誤算してゐる程だ。其上幾分大秀・曙覽の關係を、輕く見てゐるのでないか、といふ氣のする筆意がまじつて居る。思ふに、事の世間に觸れた方面には詳しくなつては居るが、個人生活に關する側は、餘程さ、さくに書いたものでないかと言ふ氣がする。最信ずべき小傳に對しても、幾分考慮の餘地のあることを感じる。だから、今滋の考へを基とした墓碣銘にも、多少の訂正を要する所があるのではないかと言ふ氣がする。墓碣銘が、小傳と一致してゐるのは、「天保十年遊二江戸一。既而意有レ所レ決、讓二產於弟一、專從二文學一」とある所だ。

若し記憶の誤りを説明つけて見るなら、曙覽の學者としての自立が、凡八年は早かつたと言ふ事になる。今一つ、正玄五郎右衞門の名跡が、曙覽三十五歳に到るまで、なぜ收る所に收らなかつたか、と言ふ問題を解決する訣でもある。こゝに多少、孝子今滋の誤記の原因があつたのではなからうか。

曙覽を語る者、皆正玄氏を、鉅萬の富を持つた家の樣に言つてゐる。だが、「小傳」によつても、「故に家弟の如きも、先子に讓り受けたる父祖の餘澤に浴し、現に市內屈指の商家たるに拘らず、未だ曾て先子より補助の請求を受けしことあらずといふ。而して沒するに及び、親戚皆其儋石無きに驚けり」とある文は、「其純正潔白概ね此の如」きを說くと共に、故人の家族としての鬱積す

る所を述べてゐるのではないだらうか。

名跡と家業を弟に讓ることは、思ふに早く結着がついてゐたのではなからうか。さうして住み處も、正玄の隱居に居るとか、別宅に住むとか言ふ風であつたもの、と想像してよからう。恐らく、妻子を抱へて三十五歳に到るまで、繼母や弟の家族と一つ軒下に住んでゐたのではあるまい。それでは、曙覽の潔い志の、無になる機會ばかりが多かつたに違ひない。それでも、本家に近く居る事の煩はしさはあつたであらう。

曙覽は、二歳で母に死に別れ、父には、十五歳の文政九年に死なれた。兄弟は三人。五郎右衞門「宣」と、妹繁子である。弟妹二人は、繼母の生んだ人々である。宣は、文政元年、兄と六つ違ひで生れてゐる。繁女の生れ年は知れない。勝山町梅田家に嫁入つた。異母弟妹の母は、三國湊の白銀屋何某から入つた人である。曙覽は幼くから、亡母の生家で育てられて、二十頃まで、其處に居たことが傳へられてゐる——山田秋甫さん調べる所の山本秀子嫗の話——。さすれば、父の死んで後も、數年は、山本家に居たことになる。

山本家は、越前武生の舊家で、酢をつくる家であり、十人扶持を賜つて居た町人である。此家六代目の主人金次郎の妹つるが、曙覽の母なる人であつた。秋甫さんの作つた山本氏系圖によると、武生の伯父には四人の男子があつて、長男以下皆夭死して、四男後に平三郎（怡僊）が、天保元年、曙覽十九歳の時に生れてゐる。恐らく、子の緣の乏しかつた伯父夫婦が、之を愛してゐたのであらう。さうして、或は彼を養うて、此家を嗣がせようとすら、漠然と考へて居たのでもあちうか。後年—文久二年—父卅七回、母五十回忌の法事に、怡僊一族を招いた手紙によると、「元來伯母樣達、在世の御なじみも御座（候）へば、御招待申上候（度？）兼而存居申候處……亡母の親族、是貴家（？）第一、殊に亡母の年回、小生々涯最早逢がたき事に候へば……」とある。だから金次郎妻とよも、嫁小姑として曙覽出生前から知つて居たものであらう。金次郎四十にして、後嗣を得たのである。從つて少くとも此後數年には、曙覽は武生の家を去らねばならなかつた。

父歿後も、伯父の家の人の樣になつて居たことは、曙覽にも、生さぬ仲の母・弟にも、幸福な姿に見えた生家に、ゆくりなくわりこむやうな形で戻らなければならなかつた。彼の京都へ出た原因も、こゝにあるのだらうか。

彼の素讀の師であらうと思はれる——父母に別れた事が曙覽に厭世觀を起させ、佛門に入らうとするやうになつたのだらうと言ふ考へは、今の處あまりに彼の生活を常套式に見てゐると言ふ外

はない。――明導は、前にも述べたが、越前南條郡大道の妙泰寺の住職であつた。此寺は法華の名刹である。此も亦武生に居たから、通ふことが出來たので、福井からは日をきめての通學も出來よう訣はない。此明導師から何を學んだか傳へる所はないが、恐らく唯の漢學であらう。此人は佛學・儒學に通じ、詩歌も能くしたと言ふが、其直接に授けられた所は想像出來ない。唯さうした人の感化を受ければ、なるほど後の曙覽の素地らしいものは出來る、と領かれるだけである。曙覽傳に現れて來るほど、ものを型に入れて考へる人ではなかつたどらうが、現代の人々よりは、もつと善い遺産を持つた前代の人である。若くても、義理を感じることには、敏かつたに違ひない。又既に學の樂しみをも覺え、學の敎へる所によつて、行ひをおさてゝ潔しとすることを知つてゐた筈である。國の家の繼母・異母弟に對する義理よりも、第一に此山本家の爲に身をひかねばならぬ立ち場にあることを悟つたであらう。其結果學問によつて身を立てようと決心して、京都に奔つたとすれば、山本家からも勿論だが、福井の家の關係者が棄て置く訣にはいかなかつた。此は親類間の義理である。さすれば、曙覽の、年たけて福井の家に連れ戻られた理由も訣る。さて其後の解決は、一筋にはつきにくかつたであらう。彼の明淨な心から、事は極めて朗らかにかたづいた樣に見えるが、其後の十數年を僅かながら自分についた家族をかゝへて、曙覽はどうして居たか、此は前に想像したやうにしか、考へられない。生家に連れ戻された時、弟宣元服の年に殆達して居た。さうして、父は死んで五七年を經た佛である。正玄の家は、なさぬ仲の母・弟が安らかにところを得て居たに違ひない。さう言ふ處へ這入つて行くことを、潔しとする曙覽ではなかつたであらう。こゝに想像することが許されるなら、妻直を三國から迎へるに到つたのは、繼母の浪風立てじの、心遣ひからではなかつたであらうか。直は夫より二つ下で、文化十一年、三國湊の酒井と言ふ材木屋の次女として生れた。商賣柄まづ相當な家の娘として、生ひ立つたことが思はれる。繼母も前に言つたとほり三國の人である。親戚等が急いで妻を勸めたのは、遊志を禦がうとしたのだと解せられてゐる。此傳への如く、歸國と同時に直が迎へられたものとすれば、足羽隱棲まで十四・五年は、生家に寄食して居たことになる。さうして其間に、長女健も生れてゐる。此亦三十歳、天保十二年の事である。其まで十年ほどは、子もなかつたことになる。其も亦あるべき事だが、何分直の嫁入つたのは、尙數年遲れて居たのではないか。昔の家庭であり、又殊に北陸地方の事であるから、一家の中に、所謂戶主の三等尊親などなる、をぢ・をばなどの終世寄食してゐる例は多かつた。だから不思議はないと言ふでふ、曙覽の場合は、やはり不自然に過ぎる樣な氣がする。又さう言ふ有樣では、彼の淨い志が遂げられないのであ

る。だから、今少し早く足羽山黄金舍に移つたとする想像すら、今滋の考へには浮んだのではないか。ともかく福井の市中を離れるやうになつた時、我々の想像するやうな幸福なあり様でなかつた事は、直夫人について傳へられる逸話によつても考へられる。所謂「堀川の段」のお俊のくどき、「人の落ち目を見すてるをさとの恥辱とするはいな」の句を引いて、遊女すら尙かくの如し。況して良家の妻女をやの氣概を示して、生家親戚の提議を却けたと言ふのも、圓滿に正玄の家を離れたのでなかつたことを示してゐるのではないか。

「阿須波山に住みける頃」の歌の一續きと見るべき「汐ならで」の歌の詞書きの「世を遁れて後は、それとたのむべき生業（ナリハヒ）もなく、貧しうものしければ、人も養はず、何わざも自らうちしつゝ、辛きめのみ見つゝ過ぎにけるを……。」とあるのは、二通りにとれる文である。貧しかつたので、傭ひ人も置くことが出來なかつたと言ふのだとすれば、下の「自らうちしつゝ」に叶うてゐる様だし、其境涯に落ちてもまだ昔の夢を思うてゐる所が見えるが、此後曲りなりでも、暮しが立つやうになつた藁屋時代にも、さうした傭ひ人をしたとは見えぬのだから、此文も眞意は外にあるのだらう。人も養はずは、「食ひ扶持をくれる人もなく、」隨つて生きる爲の方便も自ら立てたと言ふので、妻の水汲みの文には直接に關係はないのだらうと思ふ。さすれば、正玄家からも、何の扶助をせなかつたことに聞える。又曙覽一生を通じて見ても、さうのやうに思はれる。が、寺子を取り、又歌の出教授などもすることによつて、かつ〳〵煙は立て初めたことゝ思はれる。

黄金舍より藁屋へ

「……尙事物學邇止而、飛驒國邇翁御許邇在來時、汝奈何傳此事不勤有哉止依斯坐志乎痴鈍己等之身爾如斯有重荷負事者可堪母不有杼翁之志乃空成往乎將惜美、國爾歸而足羽御社神司馬來田主又學兄弟某等七人……止相語……」

黄金舍に移つたといふ翌年には、「弘化四年十一月奉賀繼體天皇大世系石碑落成詞並詩」を作つて祝うてゐる。足羽社の神主と謀つて、我が住む足羽山に建てることゝなり、同國の同門池田・山口等六人と共に、其斡旋に勤めた。其續きにもある「其之所由乎廳爾之母聞上計留爾、甚畏伎守殿之甚感甚賞賜乍、辱御言蒙理、物多爾授與賜有隨歡美喜比……」の文のやうに、有司の手を經て、春嶽に聞え上げて、其賞讃と、助力とを得てゐる。彼等七人の共同事業であるとは言へ、主動者は曙覽である。彼の學者として、世間風な爲事の初めは、此大世系碑の建立であつた。さうして、其と共に、少くとも越前國中の有識に、彼の名は知れ渡る様になつたのである。勿論、國

守の耳に達したのは、其より先のことである。此は中根雪江等の斡旋によるものと言へよう。而も此建立は、同時に、師田中大秀の遺志を果したことにもなつたのだ。其が、落成しようとしてゐた九月には、嗣子田中正訓から、父大秀の死を報じて來た。而も曙覽飛驒入りから、大秀死歿に到る滿三年の間に、高山から來訪した師を福井に迎へてゐるのである。思ふに弘化三年の事であらう。越前の國の門弟等の招きに應じると共に、恐らく、右の繼體天皇御世系について案を練る考へであつたのだらう。福井から敦賀に遊んで久しく留つたのに送つた彼の「角賀（ツヌガ）のうみ。來依る玉藻をめづらしみ、かへるの山は忘れましけむ」と言ふ歌が、松籟艸第七首目卽、「汐ならで」の次に出てゐる。大秀、御世系の事を研究して得た結果を、越前の國に碑文として殘さうとの考へのあつた處へ、曙覽が弟子入りした。さうして、其歸國に當つて、其事を托した訣なのである。だから、大秀の此行は、其建碑の事のはかどりを見に來た意味もあつたのである。越前に相當にあつた大秀門人の間に、曙覽の名は知られる事になつた訣であり、高名の學者の來訪を得た彼は、定めて鄕黨に目を睜らした事であらう。彼の日陰の生活も、やゝ日の目を見ることゝなつたのである。弘化三年は、傳へられることの多い年であつた。二月廿四日に今滋の誕生のあつたのを見て、三月四日には、もう京都へ出てゐた。仁孝天皇を泉涌寺陵に葬り奉るのを拜むとてゞある。此時の慨（ウレタ）み歌は、知らぬ人は少いであらう。

都にのぼりて、大行天皇の御はふりの御わざ果てにけるまたの日、泉涌寺に詣でたりけるに、きのふの御わざのなごり、なべて、佛ざまにものし給へる御ありさまに、うち見奉られけるを、畏けれど、憂はしく思ひまつりて、

ゆゝしくも　ほとけの道にひき入るゝ大御車の　うしや。世のなか

おなじ松籟艸の後半は、題詠の動機で出來たものを多く集めてゐる。多分同時の作でなくても、可なり接近して出來た卽興のものが多いと思はれるのは、史上の人物を詠んだ「詠史」の作物群である。其中には、極めて近世の人や、稀には架空の人物や、或は後代は名高くなつても、當時はあまり知られて居なかつた人などをも取材してゐる。又、さう言ふ題材に感興の湧き立つて來た人らしいのである。その中

御魚屋八兵衞

誠あれば、地下（ツチノシタ）にて鳴く蟲の聲も　雲井にひゞくなりけり

此は八郎兵衞とあるべきである。其事のあつたのは、後光明天皇の承應三年であつた。其から凡百九十年、二百年にはならない。其だのに、世の中は又、かやうであつた。草莽の身、而も邊土

の微臣の言ふかひなさを、どれだけ感じたことであらう。さうして、此が亦、結びつく原因を彼の心に索めさせたであらう。歌は、技工の爲却て感激の逸れてゐる不滿はある。が、曙覽の人を註釋にして、皆、適度に歌以上の情熱を受けとつてゐる。此は、曙覽の幸福であり、人柄のよさの致す所である。又何として、「ゆゝしくも」と言ひ出したところに、他の語に替へられぬ妥當性が出てゐる。彼の感激が技工をのり越えて、適切な表現を捉へた訣だ。だが二句以下になると、知性にこだはり、其結果、下句の抒情は、概念が素どほりするのである。轜車その他の威儀・嚴裝の、佛家式でおありであつたのを歎くあまりに、大御車と言ひ、牛車の緣で憂しに連ねて來たのだが、靜かに思へば、嚴肅味の整はぬ發想法である。だがさすがと思はれるのは、世の中と歎きおとした所である。この語が適當だつた、といふのではない。世道人心を歎き、末世觀を抱いたのが窺はれる點である。

次に据ゑた歌は、「むすめ健女今とし四歳になりにければ…」と端作りした痘瘡で死んだ子を悲しんだものである。

きのふまで　吾衣手にとりすがり、父よ　父よと　いひてしものを

此と、

健女みまかりて後、いくばくもあらぬほどに、山本氏がり府中にものして歸る

さ、れいは、待ちよろこべりしをさないがことを、せちに思ひいでゝ、

聲たてぬすもりかなしみ、ねぐらにも　かへりうくする親鴉かな

弘化元年二月に亡くなつた子を憶うた二首である。端書で見ると、「今とし四歳云々」とあつて、泉山御大葬と同年の事のやうに見えるが、此は、單に當年四歳になつてゐたことを言うたまでゝあらうが、後の書き方で、同年の事のやうに見えるのは、歌序として巧みでない。「きのふまで」の方は、所謂萬葉調として受けとられる要素を持つたものであるが、扨見ると、何處と言つて、萬葉式ではない。唯全體としてさう感じるばかりである。存外、語や句には、近代感が纏綿してゐる。「きのふまでわが……すがり」など、相當後代樣である。それでも、分裂感を起させない所の、單純なもの言ひが、萬葉歌に似た、ある印象を與へるのである。さうした單純化の行はれたものとしては、調子の上に今一つ緊張したものが出て來ねばならない。ところが、此歌には其が缺けてゐる。つまり常識以上に、個性の出ない憾みを感じ、情熱の不足を覺えるのである。だが、此だけの輪郭を描くすら、凡庸では出來ないのである。

「聲たてぬ」は、國學者として、あらゆる時代の歌に通じた上に出て來た調子は、かう言ふ姿で

あつた。技工はある。だが其は、知的な—本來の境遇からはひどく違つた方向へ持つて行く—約束したものを、類型であつて、而も少しばかり類型から出た、又自身以外の者の姿として哀な影を見ようとする、さうした色々な動機をまじへた作物に爲立てる。

我々とても、今も、此種類の抒情法に贊同して、同情を惜しまない人の、感じ方をも失つて居ない。だがその受けとり方は、間違つてゐたことにも氣がついてゐる。孵化しなかつた卵に死んだ子を、我が身を卵の親鳥に譬へる。かう言つた方法で、自ら憐み、悲しみをそらして居た昔人のはかない爲方に、贊成が出來ないのである。見るとほり、すべての感情が、歌の中に包み込まれてしまつて内攻してゐる。又作歌の事情を知ることによつて、其持つてゐる感情がはじめてほぐれて來る。さう謂つた直截でない處がある。此にばかり行かなかつた處、—前者の方面に向つたところに、曙覽の生命があつたのである。曙覽ほどの人でも、學者歌と言ふ側では、加納諸平や、其準門下の岩崎美隆には、遙かに及ばなかつた。又、さうした處に囚れなかつたのは、彼の優れてゐた素質の爲であり、又幸福でもあつたのである。健女の死後六年、嘉永三年正月に、國學の弟子種痘の權輿笠原良策—白翁—の需めで作つた拜除痘神詞に「……此館内爾集比登聚來留這子・立子女男乃兒童乃盡、伯神痘乎令接傳留者乃限理……」など言ふ章句を實感なしに書いたものとは思はれない。府中の山本氏とあるのは、武生の伯父金次郎である。序を見ても察せられるのは、伯父の家を訪れて還つて後、送つた手紙に書き添へた歌であらう。又「れいは待ちよろこべりし」と言ふのも、何時もの外出歸りを待つたといふより、武生からの戻りに必土産など多く携へて來たことを示すものではなからうか。

嘉永三年には、福井三橋町に移ることになつた。足羽山の住ひは、妻子の爲には、不便極りなかつたらうし、又其が人目を惹いて、四季の物見に福井人が、絶えず立ち寄つて、却て靜かな思ひに叶はなかつたものと見える。思ふに、足羽には正玄の家の隱宅のやうな物でもあつたか、其よりも恐らく、何處かの別莊のやうな空屋を借りて住んだと見る方がよいだらう。黄金舍と言ふ屋號は、別に反語らしい響きを持つても居ない。

さて、こゝに一つの疑ひがある。其は、黄金舍らしい家について、藁屋文集の記載があることである。「筑前國蘆屋里へ、越野守任のもとにつかはしける文」の一節である。

「……まことや、我師の旅のやどりに、つるがの里におなじう物したりしことの、きのふけふのごと思はるゝを、およびをりてかぞふれば、今は、やとせ・九年ばかりにやなりぬらん。……六十といふ齡になり給ひぬるにより、いはひの哥、物しくれよとの給ひおこせた

る……このわたりは火のわざはひのうちつゞきて、おのがふせやも、去年なくなしたりけり。……よろづおしはかり給ひて、さのみはなにくみ給ひそ。眞二滿ぬしには、さいつころはじめてたいめしおきけるが、きのふ三國より物し給ひぬとて、おどろかし給ひ、まろも、今しばしの程どには、歸りなんと思ふを、同じくはさるべきところにて、壽のまどゐして旅のうさを思ひなぐさみてんとの給へるにより、こゝなるあすは山のおくに、金屋それのなり所のあるに、さるべき人たち六七人いざなひ行て、日ひとひ哥よみ、酒のみあそびたりけるを……」

此消息は、日づけも省いてゐるが、『おのがふせやも去年なくなしたりけり』とあるのから見れば、安政二年に書いたことがわかる。元年六月に、福井の大火があつて、『藁屋』もやけて、再建せられたのである。安政二年から溯つて、八・九年と言へば、弘化三年或は四年であるが、大秀が福井・敦賀を訪れたのは、三年のことで、曙覽が入門した翌々年のことである。さうして、越野氏への消息には、妙に書きもつれてゐるが、その節は、大秀・守任同行だつたのである。それで、その翌年は、大秀が亡くなつてゐる。まる三年の間の師弟の交りになつた。今滋作る「小傳」には、天保十年、足羽山黃金舍に移る。さうして此年齡廿五と言ふ風にあることについては既に述べたが、其時は、廿八で、黃金舍に入つたといふのも、何かの間違ひらしい。どう言ふ訣の間違ひか、『墓碣銘』と比べると、七年からの相違である。之を兩立させる爲には、曙覽自身の爲に建てたものでなく、誰かの持ち家で、一身上の都合で、一度ならずそれへ身を寄せた家だつたと言ふことになる。今滋の書いた「小傳」に據りきる事も出來ないのだから、天保十年の方は何とも言ふことはならぬが、それにしても、二年住んだのと、十年居たのでは、たとひ記憶の間違ひにしても、あり得べきことではない。だから、どちらにしても成り立つ案は、今も謂つた他人の隱宅の樣なものを思ふことしかない。「黃金舍」の存在について惑ひを持つ私からは、此金屋何某の別莊（ナリドコロ）が、其に當るやうに思はれてならぬのである。「春明草」に、

茶つみの謌、金屋氏の乞によりて、

茵華（ツヽジバナ）　匂ふ少女が玉手もて　摘みつる春の木の芽　めしませ

と言ふのも、おなじ人に關したものであらう。かう言ふ想像をつけ加へることも、わるくはないと思ふ。曾て別莊の命名を賴まれて、金屋氏の家だから、旁その富みを祝福して、黃金舍と捩つた。後、其別莊に假り住ひをすることになつたと見るのである。さうすると、弘化三年から、足掛け三年位、住んだといふのも適當である。又、前にも之に居たと考へることも、不自然ではな

くなる。

他人の黄金舍に住んだ者が、急に自分の家を得て、その嬉しさと、佗しさを利かせて、藁屋と言つたとすれば、如何にも對照がきはだつて感じられるし、又曙覽の喜びさうな親しまれる戯れでもある。

歌集卷頭三首目の

かきよせて　拾ふもうれし。世の中の塵はまじらぬ　庭の松葉（マツノハ）（朝ぎよめのついでに）

如何にも隱者らしい喜びを持つことに滿足してゐる。だが、さうした生活ばかりでなかつた。

顔をさへ　もみぢに染（ソメ）て、山ぶみのかへさに來よる人の　うるさゝ（秋の頃、人しげく來にけるにわびて）

歌は、實生活の氣息をそのまゝ寓すものでなく、優美に類型化する所から、悠長なものになる。此も、そのまゝうけとれぬとしても、歌の表から見れば、餘裕のある生活を感じさせる。「顔をさへもみぢに染めて」など、貧しい憤りではない。唯醉人の菴をおどろかす事を、半興じて歌うてゐるのである。

あるじはと　人もし問はゞ、軒の松　あらしといひて　吹（フキ）かへしてよ

（阿須波山にすみけるころ）

歌は、前の二首に比べると、本格式になつて居る。併し感じ方・表現法は類型である。下句のをさまつた物言ひに不安は滿ちてゐるが、上二句ののびゝした發想が、救ひになつてゐる。あらしの言語遊戯は利いてゐるが、「吹きかへしてよ」はきつ過ぎて、此風の歌ののどかさを破つて居る。併し

軒の松。昔の友といふばかり、わが山住みの年も經にけり　―本居宣長―

歌としての練れは、此側には十分見える。感情が纏まり過ぎたといふより、唯馴れが人を快がらせるだけである。かうしたのより、疵はあらはでも、「あるじはと」の方が、やはり詩を失つて居ないと言へる。何と言つても、生活味が薄くて、却て古人の感慨を假りて居るやうになつてゐる。曙覽は、それでも、この大づかみなもの言ひを自分の代表的なものと考へたのであらう。同時にその生活の標識のやうにも思ひ、誇りを覺えて、こゝに据ゑることにしたのだらう。

野邊に、藁屋つくりて、はじめて移りける頃、妻の、かゝる所のすまひこそいと恐しけれ。聞き給へ。雨いみじうなむふる。盗人などの來べき夜のさまなり

など、つぶやくを聞きて、

春雨のもるにまかせて　すむ菴は、壁うがたるゝおそれげもなし

野つゞきに家居しをれば、をり〳〵蛇など出でけるを、妻の見る毎にうちおどろきて、うたてものすごき處かなと言ひけるを、なぐめて、

おそろしき世の人言にくらぶれば、逶迤いづる蟲の　口はものかは

藁屋の名は、此後久しく彼の家名となつて居た。此二首ながら、曙覽の新風として見るべきほどのものではない。それでもまだ前の「壁うがたるゝ……」には、詞の張りが出てゐるが、「おそれげもなし」は輕く實感を逸らしてゐる。「もる」は勿論、「漏る」「守る」をひきかけてゐるのだ。雨の洩り傍題なのを、語の上だけの興味で、守るに絡めたのである。言ひ方を替へて說くと、春雨の洩ることが結局家を守つてゐる訣だ。盜人に壁に穴をあけらるゝ氣遣ひもなくなつてゐる、と言ふのだ。雨の洩れる程ならば這入りたいまゝなのを、守るに聯想したり、壁をきられる虞れもない、と反語らしい感じを持たして、其を合理化する語づかひである。だが、かうした發想は、煩はしいほどある所の、短歌の病氣である。文學としてのよさでなく、此は寧、短歌の民謠時代から持ち越した言語遊戯のとりあげられた技術で、多くは却けねばならぬものである。多少の優越感らしいものを出してゐるが、此歌には、短歌としてよりも、夙くから彼にはあつた筈の狂歌の興味が現れてゐる。彼の歌と、狂歌との關係は、明らかに、又極めて多く痕迹を殘してゐる。

蛇は、はふむしであるから―昆蟲の字を祝詞では宛てゝゐるが、はふむしの本體は、蛇である。―はふむしを働して、はひ出づる蟲と續けたので、家の破れ穴などを思はせるのである。こゝに口と字は書かれてゐるが、くちには別の用意があつた。くち又はくちばみと言ふ、蝮の字を宛てるのが常であるが、くちなはの語中にも出てゐる。はひ出づる蟲だけでは表現の不完全が、くちと言ふ語によつて生きて來る。さうしてこの場合、蛇の口をいふのではなかつた。へびから聯想せられるくち―其を口にひきかけて、人言に對照したのである。さうでなくては、歌として の鑑賞に障る殘虐性が出て來る。蛇の口は嚙むかも知れぬが、人の口よりましだ―こんなむごいことを言ふのではない。併し詞書きの思はせる境遇に對して、歌が如何にも凡俗の言ひさうな類型思想である。曙覽は決してこんなことばかりを、得々と述べてゐる人ではなかつた。だが時としては、かうした尖鋭な詩人の心を、第二義以下の表現で解決したやうに感じて了ふ弊もあつたのである。逶迤の字は、集中多くある、出典のある字である。此頃の歌らしいものには、相當舊風なものがある。國學者の歌以前のもの、卽二條家風のもの、端的に言はゞ、頓阿の草庵集式の

ものも見える。

のどかなる花見車のあゆみにも　おくれて殘る　夕日かげかな

遲れて殘るの句は、彼の鋭さを消してしまつてゐるではないか。

閑居月

捨てられて　身は木がくれにすむ月の影さへうとき　椎がもとかな

ある部分の文學語―歌語―は歌の感じを調へかけて、而も他の多くの部分の鈍感になつた表現の爲に、力を失うて了うてゐる。

花ざかりに、玉邨江雪のもとにて、

あだならぬ花のもとには　たえず來て、年に稀なる人と　いはれじ

「あだなりと名にこそたてれ。櫻花。年にまれなる人も待ちけり」の本歌どりであつて、其を逆用して花を讃め、自分も毎年、其おかげで賞讃せられて來たと言ふのは才氣は見えるが、歌の調子の刺戟を失つてゐること、此が曙覽かと思はれるばかりである。此人でも、曾ては、此境地を、容易に脱却しきれなかつたのである。其と共に、此樣な歌口(ウタグチ)でなければ、鑑賞出來なかつた彼の周圍を段々引きずつて行つて、ともかくも自由自在によみこなしても、聊かのひけ目も、氣がかりも感ぜないまでに、新しい歌の發表出來るまで、自分も進み、周圍をも進めて行つた處に、曙覽の驚くべき力が見られると思ふ。順序から言へば、おなじ頃のものと思はれるが、

人の刀くれけるとき、

抜(ヌク)からに、身をさむくする秋霜(アキノシモ)。こゝろにしみて、うれしかりけり

若し、年代順に此歌が竝んでゐるとすれば、人の生活情調なり、表現なりと言ふものは、一樣に見るべきものではない。今述べたやうな近古以來の凡庸調に遊んでゐる人が、かうした古風を超えて、近世の感覺を衝くやうな姿を迸らす。かと思ふと、先の「きのふまで」や、後にあげる「今も世に」「髮白く」の樣な自由闊達であるが、稍近代に泥み過ぎるかと思はれるものも歌ひ上げると謂つた種々の樣態を示すのである。だが、此歌は、もつと歌人としての內容が整うてからの作物でないかと思ふ。

此人の作には、劍の歌人と謳はれさうに、劍の歌が多い。さうして、其が皆相當な氣魄の籠つた作物なのは、ある點では、趣味の人過ぎるほど趣味に傾き過ぎてゐる彼に、かうした意氣を抱いてゐたことが感じられるのである。其と共に其が又彼にとつては、今一段上の趣味と見る方が正しいのだとも思はれる。此は彼が萬葉ぶりの歌人だから、男性的な性格だつたから、と言ふやう

な方面から、説明は出來ない。彼は、繪に異常な嗜欲を持つたやうに、書にも、骨董類にも興味が深かつた。此點では彼は、支那趣味であつた。硯を愛した作物群も、其現れである。劍に對する愛執と言ふか、憧憬と言ふか、或は又畏敬といふか、其もやはりさうした唐土の詩人のやうな心構への上での事と思はれる。

「心にしみてうれしかりけり」かう言ふ近代的な感動は、どうして現れて來たのか、私にはまだ訣らぬ。少くとも曙覽以前には、まだ見てゐない。新派短歌もまだ明治期には、かうした發想までは要求して居なかつた。石川啄木の事業が、歌壇の上級の人たちにも理會せられて、最適當に利用せられるやうになつてから、—とだけでは、他の文壇の動きを見ないものになる。自然派文學が、英雄主義や激動の描寫ばかりが文學でないといふ事を、普遍知識にした。その頃から、短歌の上に內省風に微弱な感動を描寫することが唱へ出された。つまりかうした唱導の出なければならない程、短歌製作者の心向けは、變つて來てゐたのだ。さう言ふ時になつて、「心にしみてうれしかりけり」の發想法が、省みられ出したのだ。唯一度使はれた用例だが、これに添うて解說せらるべき、幾多の歌ひ殘された感情のある事を覺え初めたのが、曙覽の影響を當然うけた正しい根岸派の人々であつた。「心にしみてうれしかりけり」の「うれしかりけり」でない、もつと適切な感情に對しての探究を續けてゐたとも言へよう。單なる此句をなぞると言ふ氣持ちばかりではなかつた。さうした努力が、「心にしみて…」でなく、他の心理を摑んで來たのである。

ともかく、こゝまで近代風で微妙な、ゑぐるやうな悲しみを湛へた、さうして、颯爽とした中に、ざつくばらんに人の心を捲きたてる樣な發想をした、同時代人があつたであらうか。この語は固より曙覽の創めて作つたものではない。歷代の歌に見えてゐるもので、其が前代の歌を襲うて來たと言ふほど、特殊な形の語ではなかつた。極めてありふれたものに違ひないのだ。萬葉などを見ても、

韓人(カラビト)の衣染むとふ紫の　心爾(コヽロニ)染(シミ)而(テ)おもほゆるかも　—麻田陽春—

少くとも、古今集以後の書き物に出た「心にしみて」の用語例と、萬葉のとは大分變つてゐるかも知れない。それから平安朝以後の用語例を見ても、たゞ抒情詩としての誇張味を見せたゞけのものが多かつた。「心にぞしむ」など言ふ使ひ方は、語はおなじ向きにあつても、副詞形態を經て居ないだけ、表現は大ざつぱである。殆言語が違つてゐるの、とおなじである。此語は言ふまでもなく、日常語の直譯ではなかつた。古い語の中から、かうした感動の盛れるものをとりあげて、せつないやうな感情を寓したのは、此人にあつた古典表現の上に、切實な近代精神を展いて

行く力を思はせるのである。「うれしかりけり」が意表に出た續き合ひの樣に思はれて、やはりこの滿悅は「心に沁みて」と言ふことより外に、的確なもののなかつた事がわかる。其と共に何處までも、妥當性がないやうで、結句妥當性を生じて來る表現が、新しい技工として受けとらせるのである。尤、かうした爲方（シカタ）は、今はもう避くべきことを知つて來たが、尙此歌の場合、棄てるべきものではない。「身を寒くする」も「秋の霜」も此歌には適切な不卽不離の快い語感を持つてゐるが、尙生命ある聯絡を缺いてゐる處がある。其は、「拔くからに」といふ、常識風の散文式表現が、二三句をしてばら〳〵の效果しか生ぜしめない爲である。今から言へば、此だけの不足も指摘出來るが、時代として見れば、價値を高く見ねばならぬ作物である。

曙覽は、古典學者であり、擬古文學作家であつたに繫らず、一面極氣さくに當代の物をうけ入れてゐる。重くるしく古風に莊重がらぬよさがある。足羽の庵を黃金舍と命けたのも、ほんの卽興から出たものらしく、典據といふほどのものも、ないやうである。何となく、國學者・儒者のもの〳〵しさを、嗤笑（アザ）つてゐるやうに見える。町はづれに還り住んだ家を藁屋と言つたのも、やはり其であらう。

世の中は　とてもかくても過して（おなじこと〈新古今〉）む。宮も　藁屋も、果てしなければ

——今昔物語——

隱者蟬丸の歌と傳へるものから出てゐると考へられて居るやうだが、あまり名高くて、平凡な感じゝか與へなくなつて居る、此歌などから取つたものとも思へない。が、隱者の歌だけに、隱者氣分に喜びを感じて居た彼であり、歌については、一隻眼も雙眼もあつた人のことだから、「とてもかくても……」など言ふ平等觀などによさを感じてなら、つけぬ名とも限らない。

庭なる山吹の、秋、花咲きけるを見て、

黃金色とぼしき屋所（ヤド）といふ人に　見せばや。秋の山吹の花

歌集の順序から、藁屋での作と思はれてゐるらしいが、黃金舍と言ふ名に似合はぬと言ふ人があつたのに、答へたと見る方がよさゝうだ。だからやはり、足羽山居での作と見るべきであらう。

藁屋の建て物については、森恒救さんの「橘曙覽翁の藁屋」と言ふ回想錄が、「橘曙覽書簡集」に再錄せられてゐる。（あまり正確に書かれ過ぎてゐる虞れはあるが、優れた記錄である）

此家は途中一度火事に遭うて、建て替へられたが、前後廿一年嘉永元年から慶應四年八月死ぬる時まで住んでゐたのである。森さんの記述によると、福井米町の內藤理右衞門——內藤言壽か——が敷地を提供し、同門の山口彌太郎と相謀つて建て與へたものだといふ。

恐らく地所の都合で、用水を隔てゝ西山町通に向つた間口二間半、建て坪十三・四・五坪に二階つきの妻入り—恐らく物置の様なものであらう、—の家が出來たのであらう。屋敷は、森さんの物によると、百十七坪六合とあり、東西に狹く、南北に廣い地面であつたらしい。八疊半・六疊・四疊半に板間と言ふのだから、決して廣くはないが、家族の少かつた移住當時は、さして手狹にも感じなかつたらうし、新しく建てた家なり、大工も名譽の者だつたと言ふから、さのみ陋屋と言ふでもなかつたであらう。

嘉永七年六月の大火に、此奥行きの長い家は類燒して、庭木までも燒いた様である。又々前の内藤と、山口の弟—彼の門弟—清香の世話で出來たといふ。今度は、平入りに改めたらしく、向きも、西山町通に脇を向けて、西正面に建てられた。八疊二間・七疊、其に下屋つきの三疊・二疊の平屋作りである。建て坪はやがて廿坪もあつたと見える。此家は晩年足かけ十五年も住み、子も三人になつたのだから、住み荒したことでもあらう。松平春嶽が藁屋を訪れたのは、十二年目のことであるから、壁落ちかゝり、障子は破れ、疊はきれ、……など寫してゐるのも、うま人の馴れぬ目から見た誇張ではなかつたかも知れない。「……ちひさき板屋のあさましげにて、かこひも占めたらぬに、そこかしこはらひもせぬにや、塵ひぢ山をなせり……」此「橘曙覽の家にいたる詞」を讀むと、如何にも親しげで、而も之を又書き與へたのであるから、其家あるじをからかふと言ふ狃れ〳〵しいよさが讀みとられるのである。「……おのれ言へらく、みましの屋の名をわらやといへるはふさはしからず。橘のえにしあれば、忍ぶの屋とけふよりあらためよといへり。……屋の汚きこと譬へむにものなし。虱てふ蟲なども這ひ出でぬべくおもふばかりなり。」森さんの記錄には、前後の藁屋、屋根は柿葺(コケラ)で、語どほりの藁葺きではなかつたとあるのは、春嶽の文章に板屋とあるのが、觀察を誤つてゐないことを示してゐる。だが、最初から果して板屋であつたかどうかになると、當時親しく住みもし、見聞きもしたとは言へ、記憶に錯誤がないとは言へない。初めはくずや葺きの藁屋であつたのが、類燒後、假り屋らしい柿葺であつた事が、如何にも第一の藁屋ほど、手のこんで作られて居なかつたことを示してゐるのではないか。緣や床の下から竹の出て來るなどは、田舍家の常ではあるが、其が彼の常用の書齋莚敷きの土間に出て來たなど言ふのは、此莚敷きの三疊と其に竝んだ二疊間とだけが、火事直後急拵への假り屋のまゝを、新建ちへとり込んだものと見られる。春嶽が「しのぶや」に改めさせようとしたのは、藁葺きかと思つたのに、柿葺であつたといふ素朴な失望もあつたらうし、又藁屋の名が典據なげなやすつぽい感じのする上に、音覺も莊重味を缺いてゐる。曙覽は、そこを快しとして名とした

天狗であつたのを、侯にとつては、單純にすわり悪く覺えたのであらう。「しのぶの屋」に「志濃夫廼舍」を宛てたのは、曙覽のしたことであらうが、之を思ひ浮べた侯の心には、藁屋から聯想せられた軒の葱草であつたらう。だから藁屋を優美に言ひかへたゞけである。葱草の生えた草屋と言ふことである。其と同時に、橘に昔を偲ぶと言ふ古歌の心持ちを、格別どの歌に據ると言ふことなしに思ひ寄せたまでゞあらう。

藁屋へ越した翌年—嘉永二—は曙覽生母鶴の三十七年忌が廻つて來た。

母の三十七年忌に、（おのれ、二歳といふ年に、みまかり給へりしなりけり。）

はふ兒にて　わかれまつりし身のうさは、面だに　母を知らぬなりけり

ちようど此七年前、天保十三年には、父五郎右衞門の十七年忌を修した。其頃はまだ福井の町中に住んでゐたのであらう。

父の十七年忌に、

今も　世にいまされざらむよはひにも　あらざるものを、あはれ　親なし

髪白くなりても　親のある人も　おほかるものを。われは親なし

併せ見るべきであらう。どれも皆、當代の歌人のかうした時の歌口とは違つて、極めて自由に、又平凡に歌ひあげてゐる。歌ひあげ過ぎてゐるほど安げに歌ひ廻してゐる。今すこしで流れると言ふところまで行つてゐる。而も特殊な個性式な感動を開いて來てゐる。萬葉ぶりの歌として目ざゝれたものは、どうしても一度、かうした達意で、流暢で、平凡なやうな姿で以て、近代風な感情を出すと言ふ行き方から出直さねばならなかつたのである。萬葉や記紀の語彙を挿入する形式派から、萬葉の純情を思はせる樣なものに出る必要があつたのだ。

學ばでもあるべくあらば　生れながら、聖にませど　それ　猶し學ぶ

——學ばざる人をうれへてよめる

大君のみことかしこみ、うつくしき妹をふりすて　旅する。我は——旅戀

——田安宗武——

殊に、宗武のゝ第一首と、曙覽の三首とは、傾向のよく似た歌口を持つてゐる。言ひ過ぎるほど表現してゐることが、同時に亦言ひ殘したものゝある氣をさせる。あまり輪郭の完全に寫され過ぎて、內容となる感激が一足遲れて來るやうな氣がするのだ。「はふ兒にて」の「面だに」は、唯顏も記憶せないと言ふのではない。おもは俤（オモ）で髣髴である。幻影（オモカゲ）である。幻にすら母を浮べ知らぬといふのである。此早調子でなく、考へしませる筈の歌である。一・二句と三句以下の二つの

部分に分れて、てんでに歎いてゐる樣である。どうしても、第三句に踊るものがある。之を緊めればよかつたにと思ふ。かう言ふ調子も、併し萬葉ぶりが一度經過しなければならぬ復興形式なのであつた。父の方を見ても、「…よはひにも…」歌全體を口說きする氣分に陷しこむ。平常の感慨でありながら、其を歌の上に適當に處置して、卑俗感は抱かせない處まで行き乍ら、第三句で風格を下げてゐる。「髮白く」は悉く同感出來る感情である。而もかうした發想が、作物の印象を、却て卑俗ならしめて來る。「髮白く」と問題風に言ひ起し、句を跨つて「…なりても　親の　ある人も　」と言ふ風に折つて行く爲に、常識風な俗情が聞えて來るのだ。だが、時代として、かう言ふ柔軟で、容易な形で、而も最素朴に見える行き方で、類型を突破した處に、大きな價値を認めなければならぬ。昔は昔、今は今であり、さうして今は文學價値論の最誤りなく進んでゐる時でなくてはならぬ。その爲にも、過去の作物を適度にその時代に据ゑて見る側も開けて來るのを待つ。

さきはひの　如何なる人ぞ。黑髮の白くなるまで、妹が聲聞く　――萬葉集――

此歌が、曙覽の歌の暗示になつてゐることは、ほゞ疑ひがないだらう。それから、曙覽は曙覽として、時代の生活の上に其を違つた形で活してゐるのである。唯、時として、彼の音律に對する趣味と、又別に崇高性を忘れ易い性質があつた爲、時々かう言ふ姿をとつた彼が出て來るのであつた。歌集の順序でいふと、藁屋の「春雨の」の歌の次に十七回忌の作が列ねられてゐる。

墓にまうでゝ、

慕ひあまるこゝろ　額にあつまりて、うちつけらるゝ　地(ツチ)の上かな

此も父を憶うてのものだらう。局所風に感情が尖鋭に出て來る人である。と言ふより、殆さう言つて間違ひのないほど、技工が部分として徹底せられて來る。唯其部分が輝き過ぎて、他の力の行き渉らぬ處が白けて見え、輕はずみに見えたりするのである。結局技工としての效果が、技工の爲に減殺せられる訣である「額にあつまりて」は傍觀し過ぎてゐる。條件を知り過ぎて熱が生じて來ないのである。抒情詩であるべきを、敍事詩のやうに出、又其間に極めて輕微なへうきん味を寓して來る。其が我々の父の墓の歌として欲するものと違つた歌を作り出すのである。だから、謂はゞ昔において、既(ハヤ)く寫生の輪郭を知つて居たやうなものである。さうして、中核を躍り出させる事を忘れてしまつたものなのである。

竹間霰

村竹はことなしぶなり。碎けよと　風の霰は　うちかゝれども

此時代には、珍しい觀察である。だが、其見たものを見たまゝに表してゐるだらうか。「ことなしぶなり」が、其際の竹藪の姿であるのか。村竹の動き―或は不動を表さずに、概念として、村竹の感情を抽象してゐる。こんな事はない訣だ。第一頭から何の用意もなく「村竹は」と起して、何を印象しようとするのか。此は彼が感情を以て、自然の姿をうけとらなかつたのである。「群竹はそしらぬ顔で、何もなかつた顔をしてゐる。」我々は何もなかつた顔がどんな表情であるか胸にうちつけて欲しいのである。だから、如何に力をこめて、風や霰の表情をして見たところで、滑つてしまはずに居ない。「風の霰」もすつきりしたある場合の效果を豫期させる語だが、かうした緊密は、霰をも風をも活さないのである。それでも、まだ三句以下は、一・二句の斡旋次第で此以上に活きたであらう。寫生の手前で止つてゐる形が見えるではないか。擬人法に止つてゐると言はねばならぬ。

志濃夫廼舍歌集抄

この小さな曙覽評傳を書くうち、その性質の上から、彼の人の作物に對して持つて居る、私の考への傾向を示して置く必要を、感じつゞけて居た。其で、第三章として、「志濃夫廼舍歌集抄」を撰つて見た。さうして、御覽になる方々の參考に、私の採り方の標準をお目にかけるつもりで、丸印や胡麻印などつけて置いた。甚幼稚な樣でもあるし、第一、私などよりは、遙かに優れたむかし人に對して、點をつけるといふ不謙遜らしい態度は、申し訣ない氣がする。でも、かうした意味の雙紙には、さう言ふ爲方も、入り用なのではあるまいか。さう思うたから、おして、右の集から、歌を選んで見た。八百六十首の中から、新しく百七十首を拔き出したことになる。私の此爲事を、どうか、よい意味にとつて頂ければ結構だがと思ふ。

さうして、志濃夫舍廼歌集の送り假名などの使ひ方が、相當今の人々には、無理に感じられる點があるので、多く今樣に書き改めて置いた。此ついでに言ふ。(一)・(二)の文中の引用は概ね、集の書き方に據ることにしてある。其から今一つすべて歌は、私自身の採る表記法で、句讀や休止を示すあきをつけたりした。此も、かういふ形で、私はうけとつてゐることを示したのである。此亦此先人並びにあなた方の理會を願ふことである。

三　志濃夫廼舍歌集抄

松籟(カゼ?)艸(ゲサ)　第一集

阿須波山に住みけるころ

あるじはと　人もし問はゞ、軒の松　あらしといひて、吹きかへしてよ　◐

飛驒國にて、白雲居の會に、初雁

妹と寐(ヌ)る　とこよ離れて、このあさけ　鳴きて來つらむ初かりの聲　◎

旅ごろも　うべこそさゆれ。乘る駒の　鞍の高嶺(ネ)に、み雪つもれり　◎

苅　萱

敏鎌とりかりしかるかや　萱きそへて　聞ばや(けゝかゝ)、庵のあきの夜の雨　◐

むすめ健女、今とし四歳になりにければ、やう〳〵物がたりなどして、賴もしきものに思へりしを、二月十二日より、痘瘡(モガサ)わづらひて、いとあつしくなりも

てゆき、二十一日の曉みまかりたりける　歎きにしづみて、
きのふまで　吾衣手にとりすがり、父よ　父よと　いひてしものを　〃
人の刀くれけるとき
抜くからに、身をさむくする秋の霜。こゝろにしみて、うれしかりけり　〃
父の十七回忌に、
今も　世にいまされざらむよはひにもあらざるものを　あはれ、親なし
髪しろくなりても　親のある人もおほかるものを　われは、親なし
母の三十七年忌に、
おのれ二歳といふ年に、みまかり給へりしなりけり。
はふ兒にて　わかれまつりし身の　うさは、面だに　母を知らぬなりけり
……よしや今はよくもあしくも己が心のむきにこそと、綴ぢたる物をもかたへにうちやりて
夕煙　今日はけふのみたてゝおけ。明日の薪は、あす採りてこむ　〃
歸雁
春かけて　門田の面に群れし雁　一つも見えずなる日　さびしも　〃
秋田家
蚱蜢(イナゴマロ)うるさく出でゝとぶ秋の　ひよりよろこび、人豆を打つ　〃
越智通世が妻の、みまかりけるとぶらひに、
亡き母をしたひよわりて　寢たる兒の　顏見るばかり、憂きことはあらじ　○
木屋四郎兵衞が、父の喪にこもりをるに、
言あらく　いさめたまはむ聲をだに　聞かまほしくや、せめてこふらむ　〃
與女見雪
妹(イモ)とわれ　寢がほならべて、鴛鴦(フシドリ)の浮きゐる池の雪を　見る哉　〃
山家
白雲の行きかひのみを見おくりて、今日もさしけり。蓬生の門(カド)　〃
古書ども讀み耽りをりて、
眞男鹿(マラシカ)の肩燒く占(ウラ)に　うらどひて、事明(アキ)らめし神代をぞ　思ふ　〃

薄しろくなりて　たまれる雪の上も　汚さで、一日見る庵かな　○

跡といふものはあらせぬ雪のうへに、心をつけて　獨り見るかな　○

南部廣矛が吾嬬へゆくに、

わかれには、涙ぞ出づる。大夫(マスラヲ)も、人にことなるこゝろもたねば　○

五　月

梅子(ウメノミ)の　うみて晝さへ寐まほしく　思ふさ月に、はやなりにけり　○

雨いみじう降りつゞきて、人皆わびにわびたりける頃、めづらしう晴れそめたる空を見やりて、

天地も　ひろさくはゝるこゝちして、まづあふがるゝ　青雲のそら　○

馬

髻(タテガミ)(タツカミ?)をとらへまたがり、裸馬を　吾嬬男子(アヅマヲノコ)の、あらなつけする　○

咏十二支　抄

辰

やゝたくる　野べの朝日をよろこびて、そゞろ飛びたつ　いなごまろ哉　○

己

うつろひて南にかゝる日の影に、なまがわきする　花の上の露　○

午

目にあまる菜の葉の露の　ひるさびし。機おる音も　里にとだえて　○

申

あさりありく鷄(トリ)も　塒にかへりきぬ。夕食(ユフゲ)のつま木(ギ)をりに　かゝらむ　○

酉

夕顔の花　しら〳〵と咲きめぐる　賤が伏せ屋に、馬洗ひをり　○

静處落葉

ちり〳〵て　つもる木の葉のうはじめり、風も　音なき庭となりけり　○

遠山見雪

はなれうき朝床いでゝ、をとめごが　黑髪山の雪を見るかな　○

雪　朝

宵に逢へる人にはあらねど、朝寢顏　むかひくるしき　雪の色かな　○

蝨

著る物の縫ひめ〳〵に　子をひりて、しらみの神世　始まりにけり　◐

綿いりの縫ひ目に　頭(カシラ)さしいれて、ちゞむ蝨(シラミ)よ。わが思ふどち　○

屋上霰

音きけば、あないたやとぞ　唸かるゝ。身を打ちたゝく　あられならねど　◐

春よみける歌の中に、

すく〳〵と　生ひたつ麥に　腹すりて、燕飛びくる　春の山畠　○

秋夜

つゞりさせ。夜ふけて蟲の呼ぶ窓に、火あかくとぼし　在るは、誰が妻　◐

松戸にて、口より出づるまゝに、

ふくろふの、糊すりおけと呼ぶ聲に、衣(キヌ)ときはなち　妹(イモ)は夜ふかす　◐

こぼれ絲　網につくりて　魚とると、二郎　太郎　三郎　川に日くらす　○

我とわが心ひとつに語りあひて、柴たきふすべくらす　松の戸　◐

人みなのこのむ諂ひ　言はれざる我も　ひとつのかたはものなり　◐

燈明寺邨(ムラ)なる新田義貞公の石碑見まつりて、

碑面に、新田義貞戰死此所としるされてあり。此の石のあるわたりを、世に、にたつかと人よびて、地名のごとくいひならはせり。

にひ田塚　たゝかひまけてうせぬてふ　文字よみをれば、野風身にしむ　◐

三線

寢おびれて　鳴くうぐひすかとばかりに、彈きかすめたる　ものゝ音(ネ)のよさ　◐

酒人

とく〳〵と　垂りくる酒のなりひさご　うれしき音を　さするものかな　○

大石良雄

睡りつと　あばめられしも、一くさの名しろとなりぬ。ますらをのため　◐

間十次郎光興

血つきたる槍ひきさげて、落ちくさの柴のかくれが　我ぞ　さぐりし　◐

近松勘六行重母

劍太刀　燒き刄に　我と身をふれて、勵ましやりつ。仇ねらふ子を　◐

684
291

玉瀾女

此の筆は　眉根つくろふ筆ならず。山水かきて、夫に見する筆

池無名

勢田の橋　その人とほく去りて後、すてし扇を　見欲しがる哉

人あまたありて、此のわざ物しをるところ見めぐりありきて、

日のひかり　いたらぬ山の洞のうちに、火ともし入りて、かね掘り出す

赤裸の男子むれゐて、鑛のまろがり碎く　鎚うち揮りて

黒けぶり群りたゝせ、手もすまに　吹き鑠かせば　なだれ落つる　かね

かへりかゝりけるに、はる〳〵送りきて、今は別れむとするに、禮彦はた、こゝの任はてゝ、日を經ず、その國に歸るべきなりときけば、

衣手の　飛驒は百重の山のあなた。君もまた來じ。我も行きえじ

君も來じ。我も行きえじと思へども、またゆくりなく　逢ふことも有らむ

秋訪田家

餘所人は見なれぬ里の一くるわ　稻こきやめて、我をゆびさす

山家老松

眉白き翁出で來て、千とせ經る　門の山まつ　撫で褒むるかな

漁　村

家々の窓の火あかし。網むすぶ手わざに、夜をや　ふかすなるらむ

行路雨

雨ふれば、泥蹈みなづむ大津道。我に馬あり。めさね。旅びと

雪江晩釣

島山の色につゞきて、釣夫の着る笠白し。たそがれの雪

安居村弘祥寺に、春ばかり、人々とゝもに行きて、

すゝけたる佛のかほも　はなやかに　うち見られけり。うぐひすの聲

ふるさと人小槌屋善六が八十八賀

知る人のなくなるが多き故さとに、ひとりある翁　千代もかくもが

襁　褓　艸　第二集

684
291

農

暇なき田廬の　しづのなりはひや、晝は茅かり、夜は綯索ひ

水風涼

枕より　あとより通ふ風のよさ。水ある宿の　竹のしたぶし

赤

賤が家這入せばめて　物うゝる畑のめぐりの　ほゝづきの色

山家床

土牀むしろの上に、來しかたも　行末もなく　いびきかくらむ

をりにふれて、詠みつゞけゝる、

起き臥しも　やすからなくに、はながたみ　目ならびいます　神の目おもへば

閑庭霜

庭中に　來たつ狐のもの音を　枯れ生の霜に聞く夜　さむしも

わらはの、朝いしつゝなきいさちけるを、いたくさいなみ、うちたゝきなどしける時、

撫るより打つは、めぐみの力入り　渥かる父のたなうらと　知れ

ことし、父の三十七年、母の五十年のみたまつりつかうまつる

なにをして　白髪おひつゝ老いけむと　かひなき我を　いかりたまはむ

富田禮彦がむすめの、みまかりけるとぶらひに、

墨をすり　木の芽を煮やし、朝夕につかへし容儀　忘れかぬらむ

妓院雪

庭の雪　たはれまろがす少女ども。其の手は、誰にぬくめさすらむ

俠家雪

眞荒男が手どりにしつる　虎の血のたばしり　赤し。門のしら雪

まれ人を屋所に殘して、鳥うちに　我は出でゆく。たそがれの雪

薔薇

羽ならす蜂　あたゝかに見なさるゝ　窓をうづめて咲く　さうびかな

楳子

雨づゝみ　日を經て、あみ戸あけ見れば、摽ちて梅あり。その實三つ　四つ

684
291

青牛翁の許とぶらひてありけるついで、殊更に乞ひて、書畫どもとり出させ見
ける時、

古ものゝ中に、君をもすゑおきて、今の世ならぬ品と　見るかな

ひた土に、莚しきて、つねに机すゑ置くちひさき伏せ屋のうちに、竹生ひいで
ゝ、長うのびたりけるを、其のまゝにしおきて、

壁くゞる竹に　肩する窓のうち。みじろくたびに　かれもえだ振る

中根君の勘じかうぶりて、こもりゐ給ふころ、獨言に、詠みつゞけゝる、

年魚とると　網うち提げ、川がりに行きます時に　なりけるものを

府中の松井耕雪が、大きなる黒木もて作りたる火桶くれけるを、膝のへにすゑ
おき、肱もたせ、頬づゑつき、朝夕の友とす

よそありきしつゝ歸れば、さびしげになりて、ひをけのすわりをるかな

つれ〴〵なるまゝに、

一人だに　我とひとしき心なる人に遇ひ得で、此の世すぐらむ

うまれつき　拙き人にまじらへば、わかれて後も、こゝちあしきなり

寒　艸

枯れのこる莖　うす赤き苞の腹ばふ庭に、霜ふりにける

田家灯

賤どちの、夜もの語りのありさまを　篁ごしに見する　ともし火

錢乏しかりける時、

米の泉なほたらずけり。歌をよみ、文を作りて、賣りありけども

島崎士夫主の、軍人の中にあるに、

歸り來ば、脚結ひの紐も　とかぬ間に、まづ顏見せよ。待ちつゝあるぞ

朝夕にあひて語らふ君來ねば、さびしき庵に　さびしくぞ居る

佐野君のもとに、

君はやく　歸れをとのみ思はれつ。み母のみ顏　見るたびごとに

畑中君のもとに、

髮白き翁にてます父君を　おきて行きつるこゝろ　いかならむ

或日、多田氏の平生窟より、人おこせて、おのが庵の壁の頽れかゝれるをつく
ろはす。來つる男の、こまめやかなる者にて、此のわたりはさておけ。よかめ

684
291

り、とおのがいふところ〴〵をもゆるしなう、机も、なにもうばひとりて、こなたかなたへうつしやる。己れは、盗人の入りたらん夜の心地して、うろたへつゝ、かたへなる所に身を小くなして、このをの子のありさま見をる、我ながらをかしさ念(ネン)じあへで、

あるじをも　こゝに　かしこに追ひたてゝ、壁ぬるをのこ　屋中塗りめぐる

千松灣雨聲

濱づたひ　砂(イサゴ)たゝきて降る雨に、こずゑ鳴り來(ク)る　松の村だち　○

蘭　畫

山に生ひて、人きらふらむ花の繪を　みかはやうども　畫く世なりけり

門　柳

陽炎のもゆる岡邊に、つくる屋のかどの青柳　風に枝ふる

藁ぶきに　雞(ニハトリ)さけぶ賤が門(カド)。一もと柳　畫しづかなり　○

人に示す

眼前(マノアタリ)　今も神代ぞ。神なくば、艸木も生ひじ。人もうまれじ

春明艸(ハルアケグサ)　第三集

正月のついたちの日、古事記をとりて、

春にあけて　まづ看る書(フミ)も、天地の始の時と　讀みいづるかな　○

海浦妙泉寺とぶらひける時、

魚多き浦邊にいりて、魚食はぬ寺にやどりつ。二夜さへにも

美人撲蝶圖

うつくしき蝶ほしがりて、花園の花に　少女の汗こぼすかな

敗　荷

莖折れて、水にうつぶす枯蓮の　葉うらたゝきて、秋の雨ふる

夜　山

影垂るゝ星にせまりて、薄黑き色だゝなはる　おぼろ夜の山　○

雲莊畊隱圖

吾が庵を　外山の雲の末に見て、小雨(コサメ)ふる田に、牛ぬらすかな

684
291

萬竹圖

ありと有る竹に　風もつ谷の奥。水の響きをそへて　鳴り來る　○
河隈の巖に根延ふ竹と　竹。なびきぞ回る。水を狹めて　〃
澗めぐり流るゝ水を　はる〳〵と　靡き　おくりてつゞく　竹かな　〃
滑らかに露もつ苔路　風ありて、下陰くらき竹の奥かな　〃

疎竹三禽圖

茂からぬ一もと竹の　細き枝に、乘りて親まつ　雀の兒三(?)つ　〃
山がらと　雀と二つ、今一つ　何鳥なれか、竹くゞりをる　〃
竹の霜　うちとけ顔に、頭三つ　集めてかたる　友すゞめかな　〃
竹の霜　解けて雀の睡るかな。三つ　一枝に、羽をまろめて　〃

山中

樵歌。鳥のさひづり。水の音。ぬれたる小艸。雲かゝるまつ　〃

畫石

筆採りて　五日經にけむ明けがたに、ほの〳〵　石の　形見せけむ　〃

劍

福艸の　三尺に餘る秋の霜　枕邊におきて、梅が香を嗅ぐ　〃

（南部廣矛北潟の鮒贈りくれたる）この中に、二つといふものは、ことに能く動くやうなりければ、物に水いれて放ちおきけるに、日を經て益〻勢づきけるを見る〳〵、

靜かなる　こゝろの友と見をるかな。鰭ふる魚に、我もまじりて　〃
わざをなみ、靜かにあそぶ魚ぞ善き。夜中　曉　いつ見ても、はた　〃

戯れに、

吾が歌をよろこび、涙こぼすらむ。鬼のなく聲する　夜の窓　〃

春水滿四澤

道の邊の桑の立ち木も、澤水の中になりたり。春の雪どけ　〃

首夏

若葉さすころは、いづこの山見ても　何の木見ても、麗しきかな　〃

里梅

風のうめ　斜にふきて、ちりぞ入る。藁うつ戸口　牛吶ゆる窓　〃

684
291

里に入る　すなはち、にほひ嗅せつる梅に來にけり。石橋のつめ

池　蓮

しづまれる華うごかして、夕蛙　はす咲く池を　とびくゞるかな

獨樂吟

たのしみは、艸のいほりの莚敷き　ひとり　心を靜めをるとき
たのしみは、妻子（メコ）むつまじくうちつどひ、頭ならべて　物をくふ時
たのしみは、空暖かにうち晴れし　春秋の日に、出であるく時
たのしみは、心にうかぶはかなごと　思ひつゞけて、煙艸すふとき
たのしみは、錢なくなりて　わびをるに、人の來りて、錢くれし時
たのしみは、晝寢せしまに、庭ぬらし　ふりたる雨を　さめて知る時
たのしみは、晝寢目ざむる枕べに、こと〳〵と　湯の煮えてある時
たのしみは、機おりたてゝ新しきころもを縫ひて、妻が着する時
たのしみは、人も訪ひこず　事もなく、心をいれて　書を見る時
たのしみは、田づらに行きしわらは等が、耒鍬（スキクワ）とりて　歸りくる時
たのしみは、童墨（ワラハ）するかたはらに、筆の運びを思ひをる時
たのしみは、神の御國の民として、神の敎へを　ふかくおもふとき

山室山にのぼりて、鈴屋先生の御墳拜みて、

おくれても　生れし我か。同じ世にあらば、履をもとらまし翁（ウヂ）に

みやこに上りてありけるころ、山紫水明處といふ離れ屋にやどりをりて、

紫に匂へる山よ。透きとほる水の流れよ。見あく時なき

君（キミ）　迹（キ）（？）　艸（クサ）

（キミ）（クル）（？）（クサ）

第四集

華

かひありと　思はれぬるは、世の中に　櫻見くらす日數なりけり

正月十五日、（慶應三年丁卯）おのが家にて、詞の會始め物しけるに、青牛翁來たりて、やんごとなき御懷紙とり出し、且言へらく、宰相君の、今日の會ゆかしがらせ給へる餘り、己れに行きて、その有樣見てまゐり、つばらかに語り聞かせよ、とたのまへる仰せかうぶりけるよ、と示さるる、……人々よりつどひ、くつろぎざまに、

684
291

物する圓居の様など、御らんじほしう思さるらんかし。こゝをもて、今日の會の始め終りのさま、詞によみつゞり、青牛翁して、御らんじさせぞしける。…

人麿の御像のまへに　机する、燈かゝげ　御酒そなへおく　○

設け題　よみて持て來る歌どもを　神の御前に、ならべもてゆく　○

ことゞく　歌よみいでし顔を見て、やをら　晩食の折敷ならぶる　○

老いし妻の、飯匕とりて盛りたるを、一口　君にさゝげ見まほし　○

汁食と　すゝめめぐりて、とぼしたる火もきえぬべく、人突きあたる　○

客人も　あるじも、身をぞ縮めをる。下冷えつよき　狹き屋のうち　○

戸をあけて還る人々　雪白くたまれりといひて、わび〳〵ぞ行く　○

閨怨

火に彈く丸の音づれ　懼づおづも　吾が夫のゆくへ　人に問はるゝ　○

荒き波　よる晝思ひさわがれつ。水漬く屍に、君や　まじると　○

初午詣

稲荷坂　見あぐる朱の大鳥居。ゆゝり動して、人のぼり來る　○

伊吹舍先生の書きすて給へりし反古一ひら、今の先生よりうけて、持ち傳ふるに、哥一つそへてくれよ、と芳賀眞咲がこひけるにより、詠みてあたへたる、

これや此の　書看ふければ、夜七夜も　寢でありきとふ　神の筆蹟　○

地上に墮ちて朽ちけむ　菓の瓢くろめて、蟻のむらがる　○

赤心報國

眞荒男が　朝廷思ひの忠實心。眼を血に染めて燒刃見澄ます　○

國汚す奴あらばと　大刀拔きて、仇にもあらぬ　壁に物いふ　○

ひとりごとに

歌よみて、遊ぶ外なし。吾はたゞ　天にありとも。地にありとも　○

河野通雄が、刀佩き氏名よぶことを公より許されける祝ひに、

うけばりて　世に氏の名をよぶことを　許し給ひき。河野氏の家　●

白蛇（ミヘ？）艸　第五集

咏劍

684
291

肝冷す腰の白蛇。吾が魂はうづみ鎭めつ。山松の根に

破研

山に在りて　磨りやぶりたる古硯。奪はむとにや　雲窓に入る
破れたる硯いだきて、窓圍む竹看る心　誰にかたらむ
碎きつる吾が腕臂のなごりをば　窪みに見する　古研かな
珈瓦　硯ひとつに心いれて、山買ふ錢を　無くしたりけり
古硯　ゆがみし石は、吾がたから。價かたるな。軒の山松
愚にも　山を出しかな。珈瓦硯嚢にいれて、はる〳〵
松の露うけて墨する雲の洞。硯といふも、山の石くづ

福壽艸　補遺

大御政、古き大御世のすがたに立ちかへりゆくべき御いきほひと成りぬるを、
賤夫の何わきまへぬものから、いさましう思ひまつりて、
百千歳　との曇りのみしつる空　きよく晴れゆく時　片まけぬ

あたらしくなる天地を　思ひきや。吾が目昧まぬうちに見むとは

ある時、

友ほしく　何おもひけむ。歌といひ、書といふ友ある我にして
草莽　さひづりめぐる朝雀　寢耳に聞きて　時うつすかな
天使の、はる〳〵下り給へりける、あやしきしはぶるひ人ども、あつまりゐる
中にうちまじりつゝ、御けしきをがみ見まつる
天皇の大御使と聞くからに、はるかにをがむ。膝をり伏せて

紙漉き

家々に　谷川引きて　水湛へ、歌うたひつゝ　少女紙すく
紙買ひに來る人おほし。さねかづら這ひまとはれる　垣をしるべに
黄昏に咲く花の色も、紙を干す板のしろさにまけて、見えつゝ
鳴きたつる蟬にまじりて、草たゝく音きかするや、紙すきの小屋

示人

天皇は　神にしますぞ。天皇の勅としいはゞ、かしこみまつれ

684
291

天下清く拂ひて、上古の御まつりごとに復る　よろこべ
物部のおもておこしと　勇みたち、錦の旗をいたゞきて行け
岩佐十助主に
さしたつる錦の旗の下に立つ　身をよろこびて、太刀とりかざせ

山田秋甫編纂橘曙覽全集拾遺

詠十二時

寅時

檜はだぶき　簷端にせまる星みれば、しのゝめ近く成ぬ。此夜も
（原文、ひに見える字なのだらう。建の事をいふのらしいから、をかたぶきかゐ（居）かたぶきであらう。）

丑時

漏水のおとも　さびしくふけにけり。人まちよばり　うしといふまで

失題

そゝぎつる野路の朝雨　かつはれて、たくる日影に、いなごとぶ也

萬歳

故郷の三河は、梅もさき　さかず　しらで、都の春になるらむ

四　この雙紙のあとに

橘曙覽一代を、評傳體に書いて見ようと考へてかゝつたのが、此草稿である。途中幾度も、その企ては、挫けねばならなかつた。何よりもよくなかつたことは、曙覽の境涯について、私の知識の乏しかつたことである。深い尊敬を持つてるといふことだけでは、かういふ爲事の、出來ないことを、つくゞ覺つた。それに今一つは、曙覽傳にもつとよい物の出來てゐてくれなかつた事である。尤、かう言つては、此翁の事に、半生の苦勞をかけられたと思はれる永井環さん・山田秋圃さん等の業蹟に對して相すまぬことになる。だが、やはり此等の方々の著手せられたのが、もう大分時遲れであつたのである。人々の記憶を問ひ知れるだけは知らうとせられたのであるが、如何にせむ。曙覽と親しく相物語つた人が、殆なくなりかけた時分から、此方々の爲事が初つたのであつた。その上、人の記憶といふものは、凡あてにならぬものである。曙覽の場合、殊に痛切に、其が感じられる。といふのは、曙覽の四十代以後の生涯を、生きた目で見て來られた、その長男井手今滋さんの書いた「橘曙覽小傳」があつて、其を深く思はせるのである。

684
291

今滋さんが、其を書いた明治卅六年には、曙覽未亡人直刀自が、其去々年米壽を祝ひ、その後も尙年高さを重ねて、大正二年まで居たのである。多少記憶おぼろになつて居たとしても、若い曙覽と相添うて三十年、夫の姿を見瞻つて來た人である。かうした生證人中の生證人を控へて書かれたのに繫らず、小傳の記述は、可なり後先ゆきあはぬものを含んで居る。その十一年前（明治廿七年）に、依田學海にあとらへて書いて貰つた「井手曙覽翁墓碣銘」よりも、確かさでは劣るふしが多いやうである。井手氏の家人すら、既にさうなのだから、早くから相應に知られてゐたにしたところで、どうせ、此人の眞價が見直されたのは、明治三十二年の子規の紹介以後の事なのだから、鄕里でも今一度曙覽の記憶を呼び起さうとしたのは、その後のことである。さすれば、曙覽歿後、三十年、四十年たつてから、ほんたうの傳記研究家も出て來た訣である。だから、時既に遲かつたと思ふ。

私が書かうと思ふ評傳に、欲しいと思ふ入りこんだ事件の說明などは、もう誰からも聞くことが出來ないのである。

それで、まづ此翁學問に志を立て、歌も亦大いに變化しようとした時代を書いて見た。だが、その愈製作にあぶらののつて來る時代に這入らうとすると、出て來さうで影を顯さない資料を想像する心が隔てに立つて、どうしても、私の書き進む心を妨げた。それにどうも早く書いてあげねばすまない程、時がたつてしまつたので、思ひきつて、新しい方面に手をつけて見た。而も其は私だけに新しい事であつて、世間では、曙覽といふと、すぐ其聯想を浮べる位な、その國事に持つた情熱を表現した作物の評論である。

珍らしげのない爲事だけれども、一つ〳〵の歌の見方に、あると謂へばある筈の、私だけのへ考方が出てゐるだらうと、言ふことだけを據りどころにして、「晚年」を書いて、壯年に對せしめた。

それで殘るところは、彼の作物の成熟した初老以後の時期である。此には、私のいらざる解說や、批評を挿まないものを、お目にかけて曙覽の文學について、讀者自身の見識を立てゝ貰ふことにしようと考へるやうになつた。つまり早期と、いりまへの曙覽を論ずるに、其文學の價値よりも、人間や境涯を書かうとした點に、乞ひ目をおいたのだから、此章でこそ、ほんたうの彼の文學を見て貰はうと思ふのである。だが、彼翁の作物は、子規以後一種の鑑賞法が既に生じてゐるし、又此雙紙を讀まれる筈の方々の半分位は、文學に關聯のない爲事をなさつてゐるのだから、短歌の文學としての側は、多少、おひき廻しする必要があるのではないか、と考へたことである。

それで、私だけの見方に這入つて來る。まづ曙覽の作物の中の相當なものと思はれるものだけを抜いて見た。かう言ふ形をとつて見ることも、まあこんな事情からは、意味のある企てになつたやうでもある。橘曙覽の「志濃夫廼舍歌集」は、明治十一年八月に木板になつて居り、明治卅六年九月には、「橘曙覽全集」の中に收められて、富山房から出てゐる。二つ乍ら井手今滋さんの手で校訂せられたものである。其後昭和二年九月、岩波書店から、前の全集とおなじ裝幀で、相應な改訂を加へて橘曙覽全集が出されてゐる。此には、齋藤茂吉さんが後記を書いて居られる。それと、山田秋甫さんの「橘曙覽傳並短哥集」の末に、廿七首を補足して居る。此から選んで見ると、多くは、本集には擇び棄てられたものだといふことが訣る。本集の歌を抄した態度では採るべき歌がなかつた。だが、山田さんの努力を感謝する心で、その中から、少しばかり拔いた。

何にしても、この雙紙の文章は、まる二年に渉つて、時々思ひ出しては書き〳〵したものである。矛盾もあり、辻褄のあはぬ處もある。讀み返して見て、冷汗を覺える。

橘曙覽評傳　終

684
291

684
291

製本控
昭和十七年參月參日
函　号
年　月　日
備考

昭和十六年三月二十五日印刷
昭和十六年三月二十八日發行
日本精神叢書　五十八
教學局
神田一ノ九
島　秀　一
田一ノ九
刷株式會社
段(33)〔二一一四
〔三二八六

684
291

それで、私だけの見方に這入つて來る。まづ曙覽の作物の中の相當なものと思はれるものだけを拔いて見た。かう言ふ形をとつて見ることも、まあこんな事情からは、意味のある企てになつたやうでもある。橘曙覽の「志濃夫廼舍歌集」は、明治十一年八月に木板になつて居り、明治卅六年九月には、「橘曙覽全集」の中に收められて、富山房から出てゐる。二つ乍ら井手今滋さんの手で校訂せられたものである。其後昭和二年九月、岩波書店から、前の全集とおなじ裝幀で、相應な改訂を加へて橘曙覽全集が出されてゐる。此には、齋藤茂吉さんが後記を書いて居られる。それと、山田秋甫さんの「橘曙覽傳並短哥集」の末に、廿七首を補足して居る。此から選んで見ると、多くは、本集には擇び棄てられたものだといふことが訣る。本集の歌を抄した態度では採るべき歌がなかつた。だが、山田さんの努力を感謝する心で、その中から、少しばかり拔いた。

何にしても、この雙紙の文章は、まる二年に渉つて、時々思ひ出しては書き〳〵したものである。矛盾もあり、辻褄のあはぬ處もある。讀み返して見て、冷汗を覺える。

橘曙覽評傳　終

昭和十六年三月二十五日印刷
昭和十六年三月二十八日發行

日本精神叢書　五十八

教學局

印刷人　東京市神田區西神田一ノ九　大島秀一

印刷所　東京市神田區西神田一ノ九　太陽印刷株式會社
電話九段(33)〔二一一四 三二八六〕

684
291

684
291